

**KARAKORUM
EXPEDITION
OF
A.A.C.H. 1978**



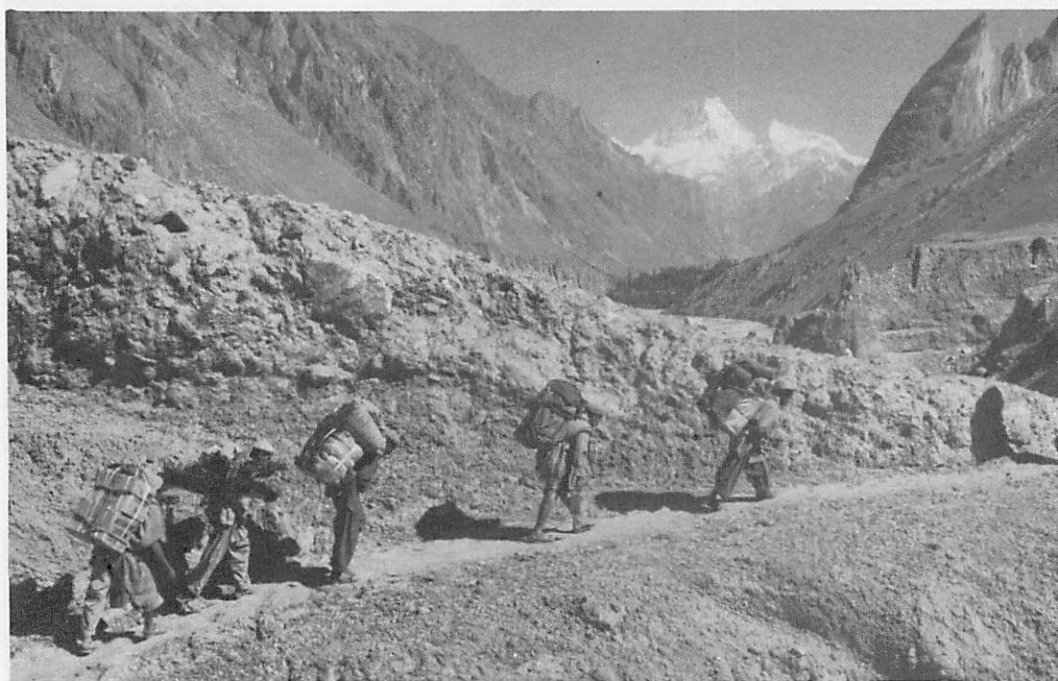


C1よりドレフェカル(6,447m)を望む

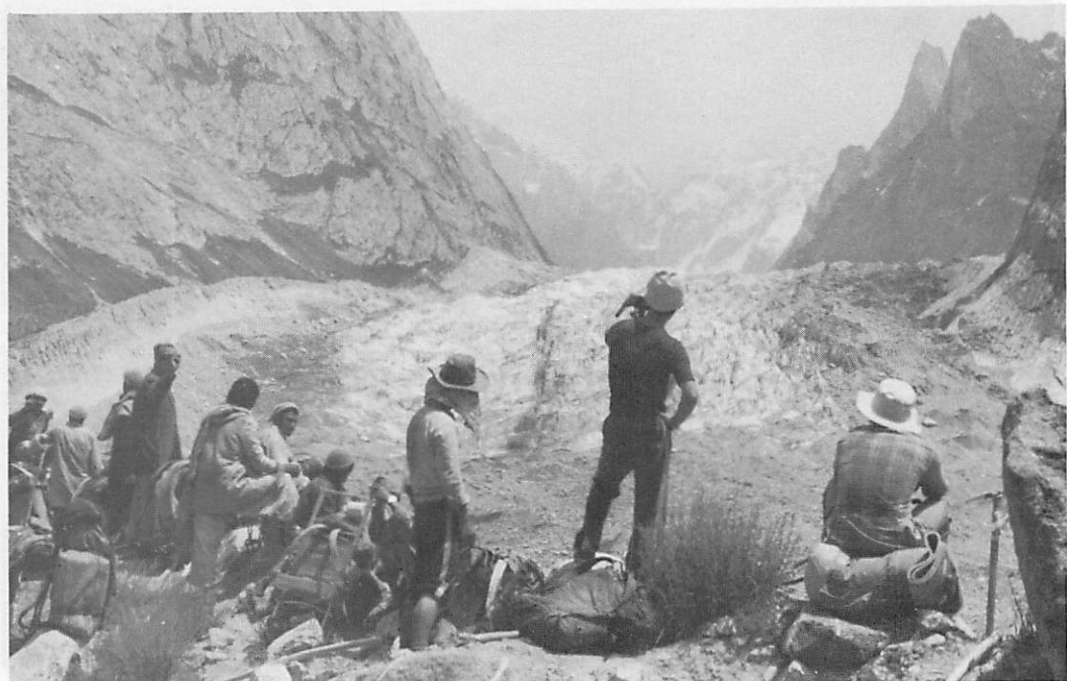
キャラバン



ザーク



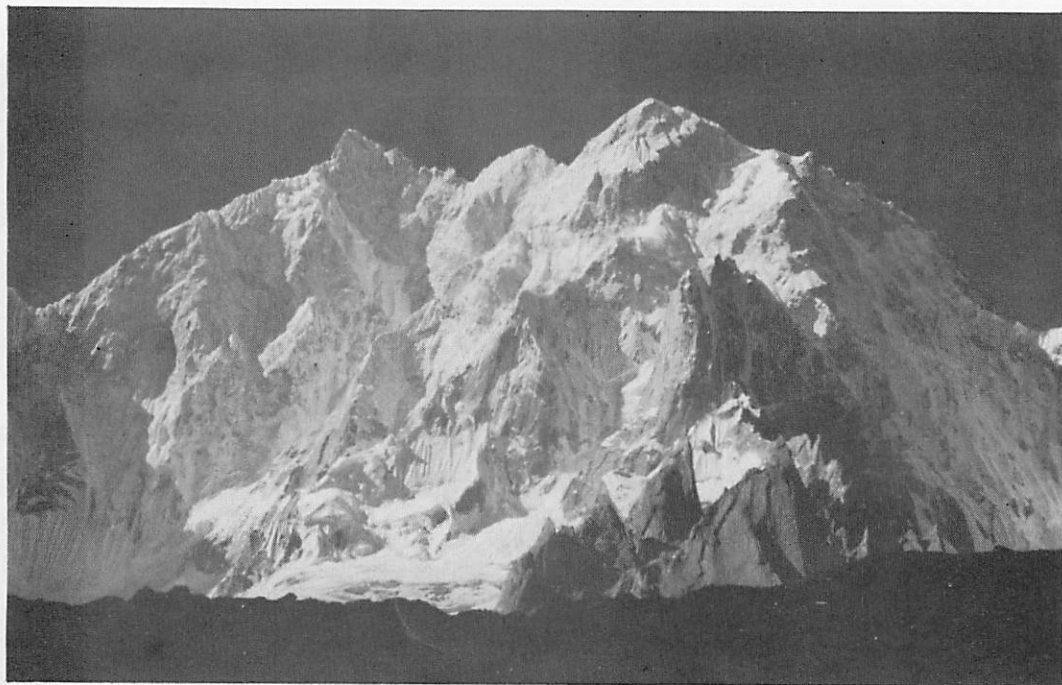
フーシュ村付近を歩くポーター
後はマッシャーブルム



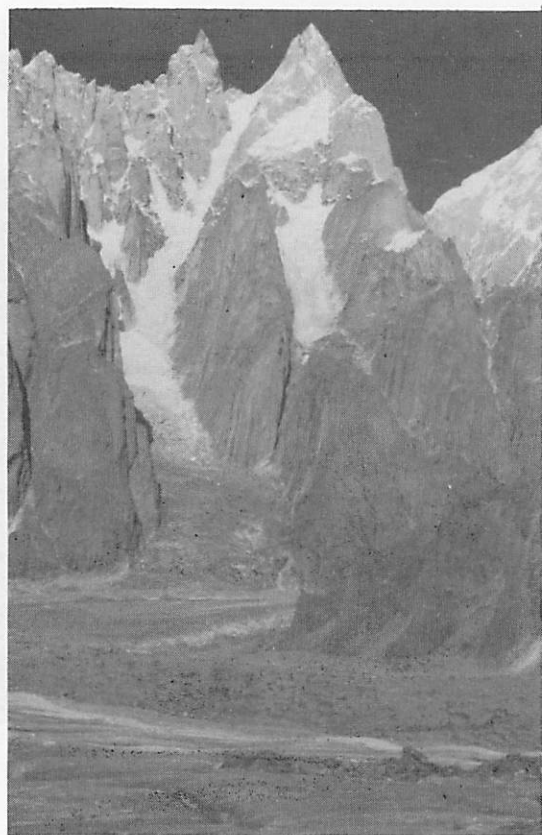
チャラク氷河のサイドモレーン
ベースキャンプは近い



氷河を行く クレバスと不気味な音



K6 (ベースキャンプより)
重量感のあるすばらしい山



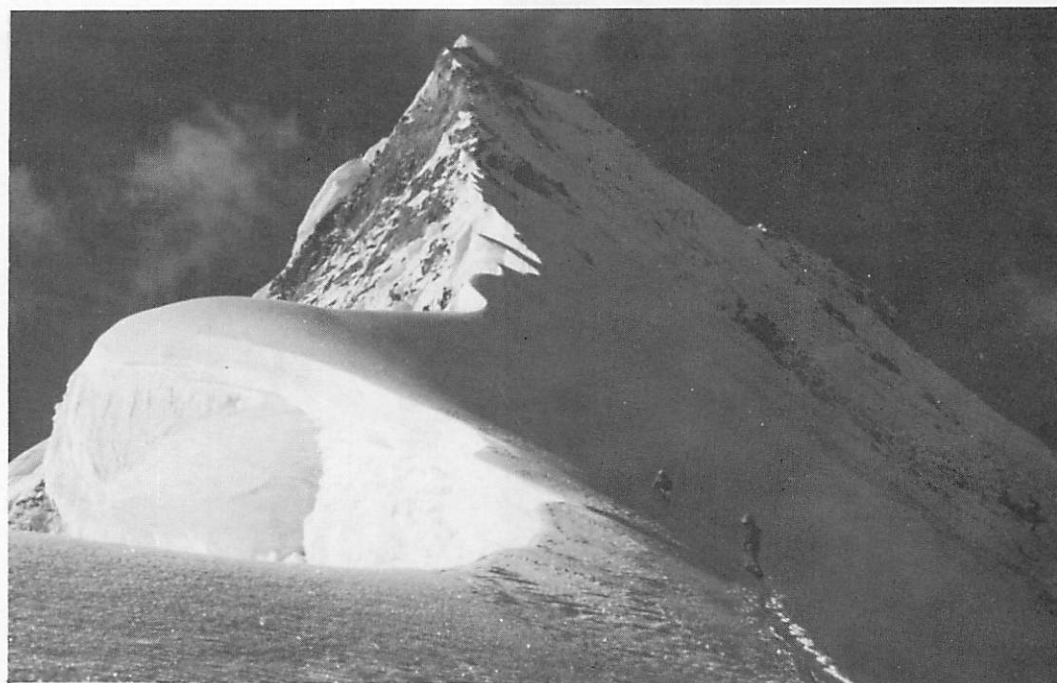
K7 (デポ地より)
山というより岩塔とい
う言葉がぴったりくる

登 攀

頂 登



6,000m 付近

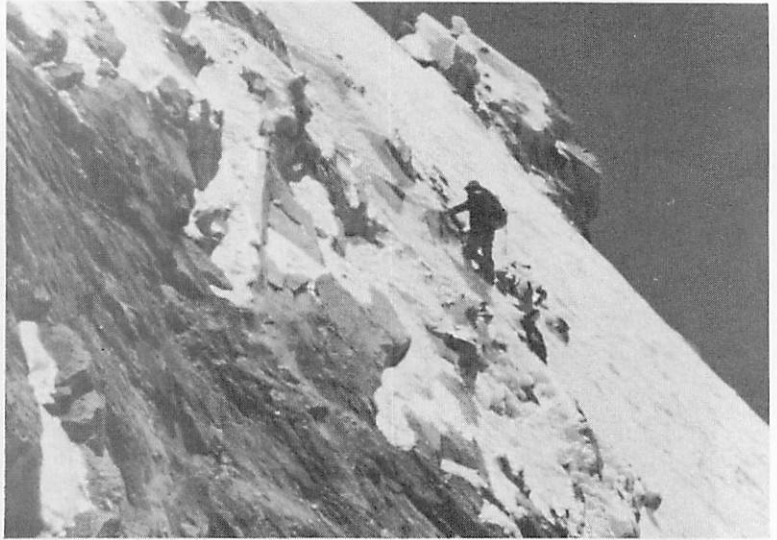


頂はまだ遠い

阿氷の谷ーUエキ、山

登 頂

攀 登



最後の難関を登る花井



下は、チェリー谷の氷河



頂稜, すぐ先に見るのが頂上



頂上に立つ(写真左 清野, 写真右 左より, 花井, 八木)



頂上から見たバルトロ方面の山々
K2, ブロードピーク、チョゴリザ等



登頂の翌日、C3にて
左より石村, 遠藤, 清野, 花井, 吉田, 毛利, 八木

ま え が き

山岳部長 山 田 真 弓

昭和53年(1978)8月17日、わが北大山岳部カラコルム遠征隊は、標高6.447mの独立峰ドレフェカルに無事登頂した。この計画はすでにその前年より具体的な計画が練られており、北大山の会ヒマラヤ委員会でも検討の上、国内・国外の所定の手続きをふんで登山申請がなされるなど、その準備が着々と進められていた。それは有馬純前部長の時のことであり、53年春に私が部長を引継いだ時は、もうほとんどその準備もでき上っていた。

この遠征計画は、かつてのアラスカ、マッキンレー遠征の時と同じように、ふだんの部の登山計画の一環として行われたものであるという。カラコルム山塊には、近年多くの登山隊が各国から訪れ、とくに我が国からも数えきれぬほどの人々が入山している。しかし今回の計画は、これら趨勢にたゞ乗り遅れまいという単純な気持からだけで企てられたのではなかった。それは部員の諸君が、カラコルム山塊の中では特に高峰とはいい難いが、未登の6.000m級のピークを選び、現在の部員の実力相応のアタックをしようということだったのである。経験豊かなOBが同行してその直接の指導を受けるということをせず、また遠征期間もできるだけ短く、そして費用もそのほとんどを自分たちで用意をするというつましい計画であった。もちろん可能な限りの準備がなされたのではあったが、何分にも未知の山である。登山では何時どこでどんなことが起こるか分らない。実際7・8月の間、私は心の隅に送り出した隊のことについて一抹の心配がなかったわけではない。そのようなことで、8月末に「無事登頂に成功」との現地からの電報をうけとった時は、本当に嬉しかったし、また安堵の念で一杯になった。

今回の成功にはさまざまな幸運も味方したのであろうが、しかしメンバーの全員が、それぞれの場面で各自の最善を尽した結果であることは間違いない。また今回のメンバーには北大ばかりでなく、札幌医大山岳部の諸君も参加された。たゞの寄り合いの混合隊というのではなく、密接な協力と融和の下に、終始統一のとれた行動がなされたと聞き、この点も大変喜んでいる。

今回の遠征に対しては、学内・学外の多くの方々、並びに現地の関係各位から多大の御厚情・御援助を頂いた。ここに心より厚くお礼を申し上げる次第である。

行 動 記 録

1977年

- 8月中旬：隊を発足。山域をカラコルムとし、6000m級未踏峰を中心に山を選択。
- 9月中旬：北大山の会ヒマラヤ委員会、総会で承認。
- 10月上旬：日本山岳協会に推薦状申請。
- 10月中旬：同協会の推薦状取得。パキスタン大使館にApplication提出

1978年

- 3月下旬：パキスタン政府より不許可の連絡。日山協を通し再申請。
- 4月中旬：パキスタン側のミスとわかり、目指すピークの許可取得。

6月13日：遠征隊壮行会。

6月26日：石村、花井、日本より出発。

6月27日：八木、毛利、日本より出発。

7月 1日：河合、遠藤、吉田、清野、日本より出発。

2日：ラウルピンディで全員合流。

3日～9日：装備・食料の購入。

9日：観光省でブリーフィングを行なう。

10日・11日：フライト待ち。

12日：空路にてスカルド着。

13日：スカルドにて買い出し。

14日：ジープ2台でカパルー着。

15日：キャラバン開始。

21日：ベースキャンプ設営。

28日：A、B、C、(中継)キャンプ建設

8月 2日：C1建設(5300m)

8日：C2建設(5700m)

15日：C3建設(5900m)

17日：6名が登頂。

8月18日：C1に下りる。

19日：ベースキャンプに帰着。

25日：スカルド着。

9月 2日：ラワルピンディで隊を解散。

9日：隊荷を日本に向けて再輸出。国外に於ける隊の活動を全て終了。

隊 員 構 成

隊 長 : 石 村 明 也 (2 5 才) 渉 外
北大水産学部 5 3 年卒

副 隊 長 : 河 合 範 雄 (2 5 才) 会 計
北大工学部 5 2 年卒
札幌医大 1 年

登 攀 隊 長 : 花 井 修 (2 6 才) 装 備
北大文学部 5 3 年卒

隊 員 : 八 木 欣 平 (2 2 才) 食 料
北大獣医学部 5 3 年卒

毛 利 立 夫 (2 2 才) 記 録
北大教養部 2 年

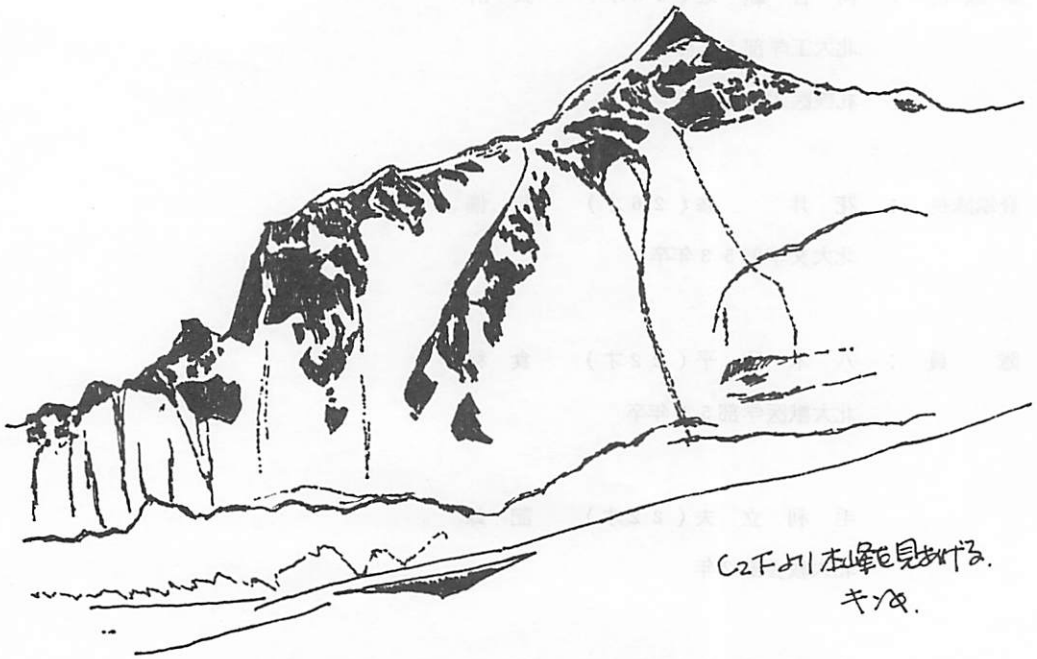
清 野 啓 介 (2 1 才) 輸 送
北大水産学部 3 年

吉田 祐一(22才) 気象
札幌医大3年

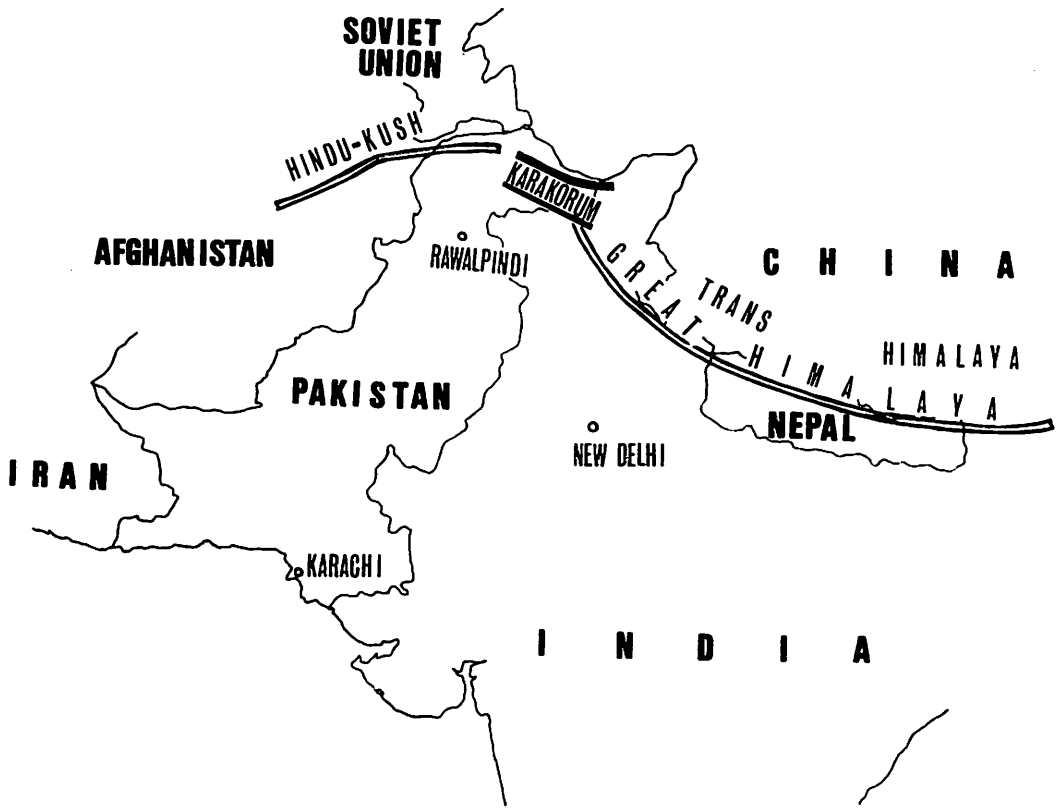
医 師 : 遠藤 高夫(24才) 医療
札幌医大53年卒

連絡将校 : Gulaham Tajudin (25才)
パキスタン陸軍中尉

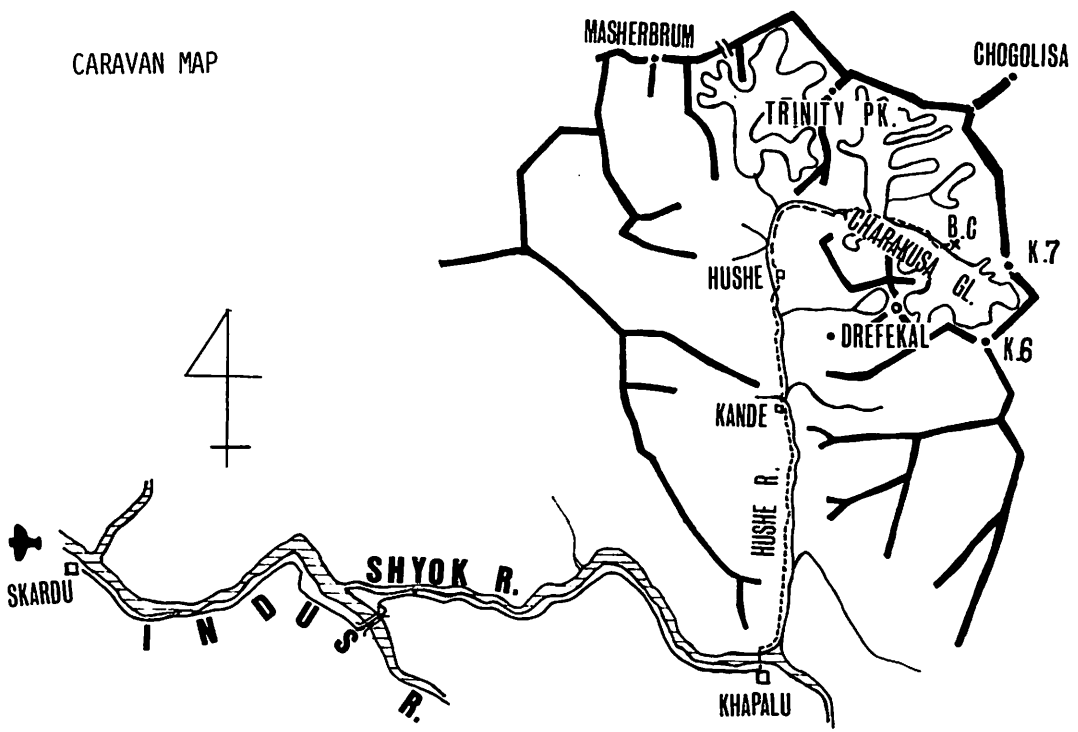
参 観 員 名



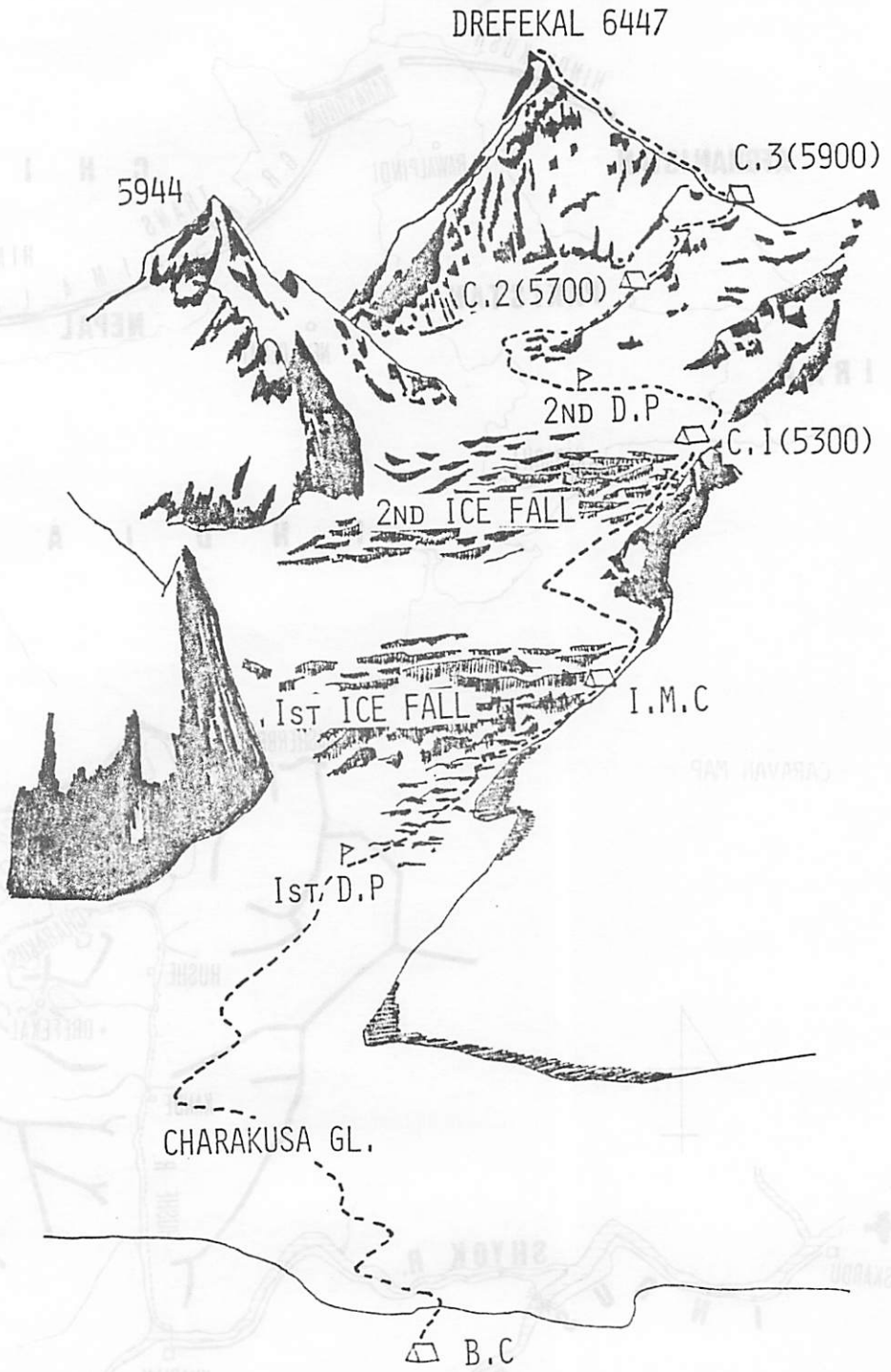
C2下川本峰を見下ろす。
キタ。



CARAVAN MAP



ROUTE TO SUMMIT



I プ ロ ロ ー グ

河 合 範 雄

77年の夏休み、南日高の一週間の沢登りの旅を終え、何をするという訳でもなく、ルームをブラリと訪れた。8月中ばの気怠い午後。窓際に、“ホンゲー”と寝転がっていたのは、Tollon（石村）だった。見飽きた、失礼、見慣れた顔。I “オーイ、来年どこかいこうぜ”、K “あゝいいね。どこかに行こうか”。僕も先の長い学生生活、時間はあるが先立つモノが無い。来年あたり、お金のあまりかからない、アラスカの氷河にスキーに行こうかなどと思っていた時だった。K “アラスカに行こうぜ”、I “アラスカ?! どうせならヒマラヤに行こう”。僕は、それまでヒマラヤへの指向は皆無だった。その理由の一つは、ポーターを雇用しての登山、つまり一つの登山の中に生活ポーターと遊び一我々との混在を、（何と言おうか、生理的にとでも言えば良いんだろうか）受け入れ難かった。そのような関係は、国内山行でもいくらでも有るのだが、だけど、遠征の場合その関係が、あまりにも直接的過ぎるので、どうしても割り切って考えることは、出来なかった。それは、キャラバン中の直接体験で、はっきり証明されたし現在でも変わっていないのだ。話をもどそう、とにかくどこでも良い、一度日本から出てみたかった、どのような形であれ。K “いいよ、どこにしようか”。ネパール、インド、パキスタン、アフガニスタン云々…。I “それじゃ、メンツを集めよう”。こうして、ルームノートに隊員募集広告を載せて集まって来たのが、北大側の隊員である。次に、急いで行なわなければならないのが、目標の山の決定であった。仮にパキスタンとすれば、10月上旬が日山協の締切りだった。とにかく急がなければならない。我々の実力から言って、まず七千メートルは無理、ということで、六千メートル級未踏峰を、ということになった。六千メートル級は、インド、ヒンズークシュではあまり残っていない。しかし、カラコルムではまだまだたくさん残っている。それで、“岩と雪”のカラコルム地図とにらめっこして、ピックアップしたのが、Koser-Gunge、Bilchhar-Dobani、無名峰（Hushe谷西方）、Mango-Gusor、の四峰であった。この四峰のうちどれか、ということで、北大山の会の承認を得ることになるのだが、なんせ、写真が全くないのだから、山の難易、ルートなど、皆目分らない。それは結局現地判断ということで、了承をいただいた。その後も、候補の山は二転三転し、K13などが入ったりしたが、今回の山6.4.4.7m峰が加わったのは、亜細亜大K7隊に77年度の資料を聞きに行ってからであった。同隊から、Charakusa G1. 側からの写真をいただき、さらに同隊と一緒に北海道の同人タンネの女性が四名、トレッキングに入ったという情報を得た。そして同人タンネから、同山を対岸約5.0.0.0mから写した写真

を入手し、何とか登れそうだなと言うことで、この山を第一志望として申請したのだった。それは既に期限ギリギリの九月下旬だった。何だかんだとあわただしき九月が過ぎ、日山協を通し、パキスタン大使館に申請書を出したのが、10月下旬、この時から3月下旬まで、期待と不安の日々が始まる。我々は、本当に行けるのだろうか？ 常にそんな思いを抱きながら、とにかく、3月末まで何もしなかった。しなければならぬことは、いっぱいあるはずなのに。ただ、したと言えば、例年のごとく、山に行っただけだった。

そして、3月下旬のある日パキスタンの承認登山隊の公表があった。だが、な、なんと、我々の隊、北大の名前がないではないか。六千メートルの山で、他の隊と競合する訳はないと思っていたのに。しかし競合している様子は、全くない。結局、どうも大使館側の手ちがいだったらしく、他の不許可隊と共に再申請し、許可を受けたのは既に四月上旬であった。さあこれからが本番、準備開始なのだ。遠征準備の各係は、一応決ってはいたものの実際的な仕事なぞほとんどしていない。皆まだ、自己負担金のアルバイトにいそしんでいた。だから、実際の仕事の開始は、五月中旬からで、それまでにやっと装備、食料のリストアップがなされたという、超スローペースだ。しかし、装備とはいっても、ほとんど自分の使っている道具と、クラブからの借り物だ。食料といっても、日本から送るのは、C1以上のキャンプ食だけとキャラバン中の若干の日本食だけ。あとは全て、現地購入という方針だったので、量的な苦労はほとんど無い。BCまで行けりゃ何とかなるさ、気負うことなんか何も無いといった、気楽な気分だった。何も分からないことだらけなので、居直っていたような気もするのだが。

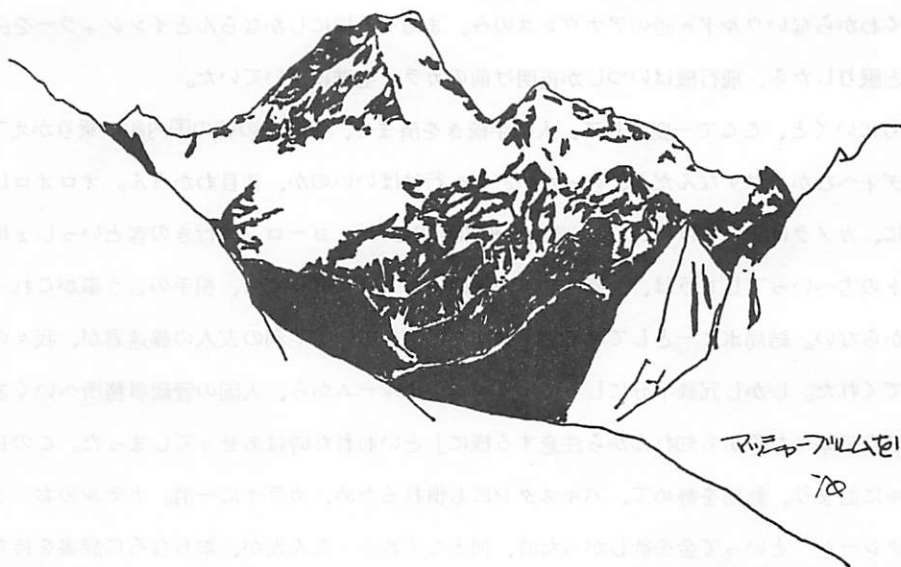
ところが、小生会計の立場から見ると、BCからは、お金がかからない、しかし、BCまでにかかるのがお金。当初の楽観的風潮では、1人三十数万で行けるはずだったのが、なんだかんだで、結局四十五万円。ところがどうも、これでも足りない様子。ここまで来たら意地でも日本を出なけりゃならない。そこで最後の手段は募金活動しかなかった。出発直前のあわただしさの中、短期日で百五十万円もお金が集まったのは、貧乏隊としては、心強いものだった。遠征後、日本にもどった時の残金が、二十数万円。すなわち寄付金なしでは、BCにたどりつけたのかも、怪しいものだったのだ。

何だかんだとあわただしく、また本当にこんないいかげんな準備でいいのだろうかと思っているうちに、日は過ぎて行った。一段落した六月中旬、遠征隊の杜行会を雪印パーラーで開いていただいた。それを機に、先発四名が東京での買出し、準備等の為に札幌を発った。あとの札幌残留組の仕事といえば、寄付金集めだけ。とにかく集めにゃ。

先発成田発の連絡を受けて約一週間後、後発の医大隊員と小生は、札幌大正面玄関で女子学生から花束をもらうなど、盛大な見送りを受け札幌を発った。東京で、札幌大の篠原宅に世話になり、所用を済ませたあと、箱崎町で、輸送費を少しでも浮かせようとする手段の三十数Kgの手荷物も、無事

通過し、バスで成田に向う。17:00南回りカラチ行きのパイロット機が地上を離れたとき、小生は思った。“これで九十%成功だ！”

平 野 木 村 人



Ⅱ 酷暑のピンディ 乾燥のバルティスタン

八 木 欣 平

とにかく飛行機は成田空港を飛び立ってしまった。

成田空港のおかげで、全く見送りの人もいない中、俺（キンペ）と毛利はPIA（パキスタン航空）に乗った。色んな都合で、先発隊は隊長のトロン（石村）とボンズ（花井）が、26日の北京経由で、俺と毛利は、南まわりのPIAに27日に乗った。

初めての経験というものに対しては、期待と不安というものは、つきものだが、遠征の準備にかまけていて、オレも毛利も、英語の片言にも自信がない。そんな2人が初めて外に出るのだ。互いに頼りにならないのは、目に見えている。PIAは、なんというカシュワーズは数人で、あとはあのかついシュワード。独特の目つきでジロツと見、「こいつら、よう国際線にのっとるなあ」とでもいったそう。それでも、空港で買った英会話のアンチョコ頼りにタバコかってみたり映画をみたり。バンコックを過ぎると、それまであった日本語のアナウンスも無くなり、半分も理解できない英語と、全くわからないウルドゥ語のアナウンスのみ。まあなる様にしかならんとインシヤラーを決めこみ、ひと眠りしたら、飛行機はいつしか夜明け前のカラチ空港に着いていた。

予定通りにいくと、ここで一度降りて、入国手続きを済ませ、その日の朝の国内線に乗りかえてラワルピンディへむかうはずなんだが、いったいどこへ行けばいいのか、皆目わからん。オロオロしているうちに、カメラは忘れるは（これは奇跡的に無事回収した）、ヨーロッパ行きの客といっしょにトランジットの方へいってしまうは、大騒ぎ。英語を駆使して尋ねてみても、相手の言う事がこれっぽっちもわからない。結局ボケーとしていると、領事館に務めている毛利の友人の篠速君が、我々の危機を救ってくれた。しかし冗談半分にしろ、トランジットルームから、入国の管理事務所へいくまで、空港を「鉄砲で撃たれるかも知れんから注意する様に」といわれた時はあせってしまった。この日は、街のホテルに泊まり、動揺を静めて、パキスタンにも慣れるため、カラチに一泊。ホテルのおっさんが、「バクシーシ」といって金を欲しがった時、何となくわかったんだが、おもむろに辞書を持ち出して、「辞書にのっとらんから何いってんのかわからん。」という様な顔をしてやると、そのおっさんは笑って部屋から出ていった。とにかくそれでも次の日は無事トロンとボンズの持つラワルピンディへ飛び立った。

カラチもそうだが、ラワルピンディもとにかく暑い。出発前の東京での数日間も暑い日が続いたが、さすがにパキスタン、太陽光線は、ジリジリと肌をこがす様だ。ピンディの空港から Mrs. Davis

のホテルまでのTAXIの運ちゃんと例によってひともんちゃくあったあと(とにかく初めての客だと思つと、絶対にボってくる。)トロンとボンズに合流、同じホテルには、原真氏ひきいるラトック隊のパーティが、荷物の関係でくすぶっておつた。

早速、偵察と称して、バザールへ出てゆくバザールには色んな店が軒を並べ、特別なもの(豚肉とか酒)を除いて殆んどものが手に入る。食糧や衣料品などの生活必需品は極端に安く(勿論、国際的に円の力が強くなった所為もあってそう感じるのだらうが)、逆に電気製品や、観光客相手のみやげ物は高い。要するに、人間が生きていく分には、充分安くやっていける様になっている。ジュースは色んなものがあり、肝炎がどうのこうのという前に飲みまくっていた。結局、それ程注意していたわけではないが(むしろ非常にルーズだった様だが)誰一人肝炎にも腸チフスにも罹らなかつた。しかし下痢の洗礼は免がれず、隊の下痢止めは、ラワルピンディで、殆んど消費してしまつた。食べ物ではないが煙草の種類の多いのが、うれしくさせる。結論から言えば、日本のハイライトがうまいのだが、やはり数十種のタバコは、飽きさせない。

7月2日には、別送の隊荷も受け取りが完了、後発隊のプロ(河合)やドクター、吉田君、清野も到着、やっと一同に集まる。全員がひとつの場所に集うのは、何度目かな、これから登山を終えて解散するまで、ずっとこのメンバーなんだ。

隊長の方針通り、1日1仕事のペースを守り、それぞれの分担をも、バザールへいったり、イスラマバードまで行って、観光省や大使館に話をつけにいったり……。3日には、いよいよ問題のリエゾンオフィサーと会う。なんせ全く見ず知らずのパキスタン軍人を隊員同様に接しなければあかんというのだから。習慣も宗教も異なり、言葉もろくに通じん(これはオレ達が英語をちゃんと喋れんから悪いのだが)人間と、何らかのトラブルがあつたとしても、ある意味では、不思議なことではない。しかし結論的にいえば、我々のリエゾンオフィサーのグラムタジュディンは、我々にとって最高のパキスタン人だった様な気がする。軍人として、パキスタン人としての誇りを忘れず、又、リエゾンオフィサーとして我々の隊が常にベストを尽くせる様に配慮してくれた。ただ、この頃では、彼がくると、トロンやドクターを前面に押したてて他の連中は、特にオレとボンズや毛利は、極力顔を合わさない様にした。……なんせ、顔をあわすと、『キンペイ!』と親しげな顔でつめより、手を握り、肩を力いっぱいたたいて、あとはようわからん英語でまくしたてられるのだから、たまつたもんじゃない。

6日にはブリーフィング終了、食糧や装備順調にそろい、特に食糧なんぞは、隣のラトック隊から、あまりの食糧を買いたたりして、予想外の日本食がくるとほくそえんだり、あとは梱包と出荷のみとなる。毎日夕方には、原さんと貴重な酒をチビチビやりながら歓談したり、近所のガキを集め

て、サッカー試合をやったり、楽しくすごす。

7日には梱包もおわり、スカルド行きの飛行機のブッキングも終了、あとはフライトまじの体勢となる。ホテルもMrs. Davisを引き払い、街中の安宿に荷物をうつし、リエゾンと映画をみたり、街をほっつき歩いたりして時間を潰す。

有視界飛行というか、とにかくスカルド行きの飛行機は、なかなか飛ばんことで有名。2週間前に日本を離れたはずのリモ山群の鶴城山岳会のパーティと空港で顔をあわせる。まあ、ここまできたら、神が決めることだ。別にあせることもあるまい。体調も皆少しづつ上向いていたが、相変わらずの下痢、そんな中で、12日は待望のフライト。スカルド行きのフレンドシップは、我々をのせて、イスラマバード空港を飛び立った。

さてはて、皆の期待通り、飛行機の右前方には、やがてナンガバルバットがみえ始める。そういえば、Mrs. Davisにいたメスナーは、ひとりで登るとかいておったナァ……。まあ、彼は彼、我々は我々だ。ひとしきりはしゃいだあと、飛行機は高度を下げ、インダス川の谷間を縫う様にして、砂漠の様なスカルド空落へと降りていった。

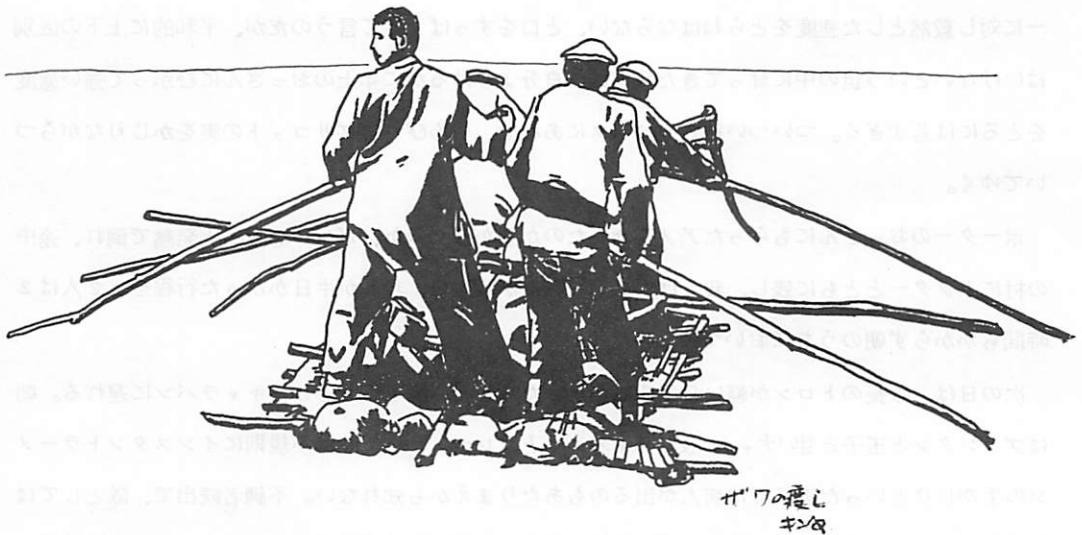
スカルド空港といっても、空港とは名ばかり、からからに乾いた平地をただならしただけの様なもので、12km程離れた村との唯一の交通機関のジープは砂塵を舞いあげて走る。日射しはさらに強く感じるが、ピンディヤ、カラチの様な暑さとは全くちがう。身体も水分が惜しいのか、皮フの表面がカラカラに乾く。当然、木陰でも建物の陰でも、その暑さをやわらげてくれる。後発の荷物をC130という軍用機からうけとり、ジープによってスカルドの村へいく。村といっても、このバルチスタン地方の本拠地であり、大きなバザールや、カレッジや、家畜病院までもある。人々は、ピンディヤカラチの様な鋭い目付は消え、どことなくモンゴル系のあのベチャッとした顔付きとなる。言語も独自のバルチ語というものを使い、チベットとの類似性を感じさせる。レストハウスの横に天張って宿とし、石油の購入と最後のパッキングを済ませる。夜は、空に近い所為だろうか、満天の星空である。丁度南の空には、サソリ座が昇っていた。

14日には、今迄いっしょだったラトック隊とも別れを告げ、鶴城山岳会と前後しながら、3台のジープを連ねて一路カパルーを目指す。まるでジェットコースターとはいわないまでも、川沿の道は、ジープの本領を発揮せざる得ない様な悪路が続く。途中の村で休憩しながらも、昼前にはカパルーに着く。ここで鶴城パーティとも別れ、我々はレストハウスに陣取り、ポーターの雇用を始める。

確実な現金収入の少ないこのあたりの村人にとってポーターという職業は魅力的なのであろう。30人のポータを雇うのに50人も60人も希望者が殺到する。このあたりの生活水準で、パキスタン政府の決定した賃金は、はたして正当なのだろうか。貧乏隊だから金が惜しいのではなく、不必要

な金がこの土地のバランスを崩すのではないだろうかと思ってしまう。今更我々の隊がケチったりするわけにはいかないが、未踏の山域もなくなるだろう未来に、いったいどう変化するのだろうか、やがてジープ道もしっかりして登山するのにポーターは必要でなくなってしまうだろう。その時はその時でたくましく適応していけるのだろうか。

簡単な健康診断をやったりして結局ヘッドポーターと、コックのアリ爺さんを含め35人雇うことに決め、明日の出発を伝える。村の役人の写真を、持参した秘密兵器のポラロイドカメラでとって、御気嫌をとる。毛利はその場で現像できてくる写真を見て“驚異だ、初めてみた”。ドクター曰く“どうせ昔の隊の奴がもってきてるだろうナァ”。村のボリスと湧水のある河のそばの溜りで泳いだ所為で、風邪をひいたらしく、調子は悪かったがとにかく明日からは夢にまでみたフーシェ谷のキャラバンである。心が弾まずにはいられない。



Ⅲ 霊の住む家めざして

八 木 欣 平

キャラバン開始、と思いきや、目の前にはインダス河の支流であるシャヨーク河が横たわっている。とりあえずこの河を乗り越さなきゃならない。とはいってもこの河には橋も渡し舟もなく、あるのはザークと呼ばれる羊の皮を浮きに使った原始的な筏のみ。この筏にのって棒（櫂ではなく、ただの棒なのだ）を使ってバシャバシャと対岸にむかうのだ。話にはきいていたが、泳げないプロは真青な顔で、今にもバラバラになりそうなザークをみつめる。ザークは当然対岸に着くまでに2 Kmも3 Kmも下流に流される。対岸についたら、エッチラオッチラ上流に担いでゆきそこからこちら岸に流れつき、またエッチラオッチラ上流へ担ぐというくり返し。30人のポーターと全部の荷物が対岸のサリーンの部落に集ったのは、既に日暮れ時、その間、昼飯を食べられず、アプリコットと、ポーターが自分で作ってきた携帯食料の様なものをもらったりして耐え忍ぶ。全く幸先の悪いスタートだったが、夜はアリ爺さんの作るチャパティとカレーを食って、その日は没とする。

2日目より、いよいよ本格的なキャラバン開始である。プランタンとお茶という軽い朝食をとって、6時半にはサリーンを出発。ポーターたちは、少し歩いては休み、また少し歩いたかと思うと休み。最後尾につくと決めた隊員は、彼らをせかすのに一苦勞。まじめに歩けば半日もかからぬ行程を充分に1日を費やして歩かれるのはまいったものだ。隊長は我々はサーブなんだ、サーブとしてポーターに対し毅然とした態度をとらねばならない、と口をすばくして言うのだが、平和的に上下の区別はいけないという世の中に育ってきた我々は、自分よりはるかに年上のおっさんにむかって強い態度をとるには若すぎる。つつい彼らのペースにあわせ、のんびりアプリコットの実をかじりながらついてゆく。

ポーターのおっさんにももらったアメを食ったのが悪かったのか、ボンズが腹痛と発熱で倒れ、途中の村にドクターとともに残し、我々は先に進む。しかし翌日、我々が半日かかった行程を、2人は2時間もかからず朝のうちにおいついたのだが。

次の日は、隊長のトロンが軽い日射病にかかったらしく、調子をおとし、キャラバンに遅れる。朝はプランタンと玉子と甘いチャイ、夜はチャパティとカレー、そして昼は不規則にインスタントラーメンの生かじりといった調子では病人が出るのもあたりまえかも知れない。不調者続出で、隊としては大変なキャラバンとなった。といっても個人的には決して調子は悪くなく、キャラバンを満喫する。とにかく、半年前から憧れ続けたフーシェ谷を今歩いているのだ。目の前にはマッシュャーブルムが、

でんと腰をおろし、両側には乾ききった岩山がせまり、沢の流れこんだ扇状地に僅かな緑と、人の住む岩屋があるだけのフーシェ谷だ。日射しの強さと乾いた空気は、カラコルムにやってきたという心を満たす。ただ、あくまで登山という行為、目的をもつ以上口をあけてボケーとしているわけにもいかず、キャラバンの足は自然と速くなるのであった。

18日には最奥のフーシェ村に辿りつく。比較的元気なプロとオレと毛利が先行し、西面の沢に高度順応をかねて偵察に出かける。地図上では西面から目標の6.447峰がみえるはずだが、沢に入ると、灰白色の雪融水がドーと音をたてて流れ、ゴルジュが続く。適当な所で引返しを決め、おそらくこれだろうと思われる山をボラロイドで写真にとり、簡単にスケッチをしてフーシェに戻る。

フーシェのキャンプサイトは、村はずれの泉のある草地で、マッシュルームを間近に臨む、非常に快適な場所。今迄のキャンプサイトでは、カップにすくうと砂が底に沈殿する様な雪解け水で飯を炊いていたんだが、ここではそんなこともなく、ニワトリを買って殺し、乾燥醤油を使ってすきやき風に味つけし、パキスタン米もよく洗って圧力釜で炊き久々に和風の夕食をとる。ドクターは、調子を崩した隊員だけでなく、村人もみてやらなきゃならなくて、大忙しである。

この村で6.447峰の写真を見せると、誰とはなしに“ドレフェカル”という。初め意味が全くわからなかったが、リエゾンとウルドゥ語のわかるポーターに通訳してもらうと、霊の住む家という意味らしい。あまり気持の良い名前とは言えないが、我々は素直に現地呼びに従うことにした。(計画当初は、何か我々で名前をつけようと目論んでいたのだが)。ドレフェカル、はたしてこの山に住む霊は悪霊なのか、それとも、我々を守る聖霊なのだろうか……。この日、天上には満月が冷たく輝いていた。

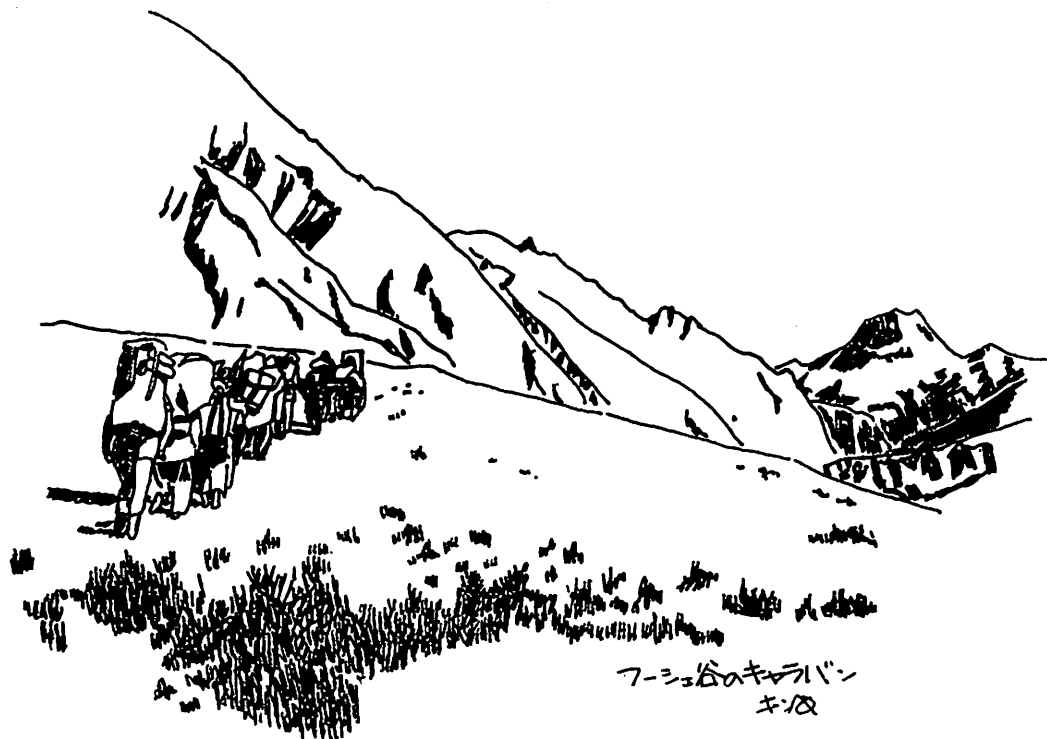
次の日、ゴンドゴロ氷河の入口のシャイスチャーという放牧地まで。彼らはゾウと呼ばれる、角の大きなウシを放牧しているのだ。相変わらずポーターは度々休み、歌をうたったり、踊ったり、昼時にはお茶をわかつて、我々にバルティティという塩とギーの入った一種のスープの様なものをのませてくれたり。高度もあがり、道もだんだん悪くなるに従ってポーターたちは本領を発揮、スタスタと何の苦もない様に歩いてゆくのだが、隊員の方は全く調子が出ず、後ろからせきたてていたはずなのに、いつのまにか、追いつくのに懸命になる様な次第。

20日には、チャラクサ氷河の舌端に辿りつく。憧れの氷河だが、厚い堆積物をかぶって氷の表面はまだみえない。目の前にはチャラクサ氷河の怪峰K7が門番の様にそそり立っている。右手には6.325mのナミカ峰が美しい。この日は、スパンセルというチョゴリザ氷河の出合に泊。ポーターたちは夜になると唄い、我々も参加する。キャラバン中続いた晴天も、この夜崩れ始め小雨が降る。ポーター用の雨具をもってこなかった我々は、ただひたすら、BCに着くまで本格的な雨が降らないこ

とを折るだけ。コックのアリ爺さんが足をくじいて調子がわるそうだし、ずっと元気だったプロが腹痛で寝込む。食料のせいもあるだろうが、身体が、未経験の高度に対して反応しているのかも知れない。既に4000mに近い。

翌日、プロとドクターと吉田君を残し出発、氷河の上をウロウロしながらガスの中BC着。77年にK7の亜細亜大学隊がBCをもうけた所と同じ所だ。小雨のバラつく中、次々に到着。

サイドモレーンの作る平地に高山植物が群生し、きれいな水が流れる美しい場所だ。ポラロイドでポーターの写真をとってやり、金を渡してかえす頃には雨もひどくなる。22日にはプロもBC入り。休みなしの不規則なキャラバンだったが、無事全員集結。悪天周期に入ったのだろう。周りの山はガスでみえず、時折いやらしい雪崩の音がきこえるだけ。とにかくここで一息いれることが必要だろう。BCには我々8人とリエゾンとアリ爺さんだけとなった。これからは我々の力だけでやらなければならないのだ。最初にたてた山岳部の部旗とパキスタン国旗が雨水をすって重くたれさがっていた。



フーシェ谷のキャラバン
キヌ

Ⅳ 長いアプローチ

吉 田 祐 一

7月22日(小雨)

前日、河合の発熱で、スパンセルに1泊したが、大部よくなったので、Dr.とハムザアリと4人でBCへ向う、のんびりと行くのだが、Drが頭痛をうたえて調子を悪そうにしている。ここが4.000mあたりなので、高度障害の第1関門なのだろうか、この日も小雨がずっと降っている。BCは回りの氷河や、きみの悪い岩肌と比べれば、楽園である。カーペットの様に草がはえ、その中に花がぼつりと色をそえ、その中を小川が貫く。ここに、私達の持っているテントがずらりと6つも並んだ。先についている連中の顔を見ると、むくんでまぶたがもう重くて、目が見えないかと思われる様ながいる。聞けば、みんな軽い頭痛があるというが、食事が進まぬほど重症なのは、河合だけであった。ともかく本日は休養日、ゆっくりと寝ることにする。午後から本格的な雨、フライシートがないテントにいる河合と僕は、ひどい目であった。

7月23日、小雨ときどき曇

1晩寝ると、昨日の頭が重いような不快感はなくなった。花井、毛利氷河の偵察に行く。残りのもので荷を整理する。もともと持ってきている物が少ないのだから、整理といっても、昼食の用意と、それにフィックスザイルの巻き直しである。ザイルを持って走らされるが息がきれる。走るのには実に不快だ。

昼食は、ほとんどビスケットである、その他、アタのホットケーキか、お好み焼きだそうだが、あんまりよいとは思わぬが今までの様な下痢はすまいと思う。ベースキャンプまでは現地食とかで、チャパティか現地米の毎日が続いているんだから、早く日本のものが食いたくなってきた。午後雨が止む、そこで東の斜面を登ってみる。残念な事に、登って見たがガスのため氷河は見通すことができない。200m位も登ったが、息が切れる。特に下る時、走ったら、胸が苦しくなり、うずくまってしまふ位になった、ゆっくりマイペースが良いとの教えが身にしみた。

河合がいい出っぺで、岩小屋を作ろうと石を集め積むが、思った以上に大変で、時間も大部かかりそうなので、あほらしくてやめてしまった。

そんなこんなで1日の大半が過ぎていく。偵察の話を開けば、この氷河を渡って、アイスフォールへ行くにはずい分と時間がかかりそうである。

夜、ラジオから、ダークダックスと思われる歌が聞こえた。びっくりしてさらに聞いていると、日

本語で「日本の同志の皆様……」と、モスクワの日本語放送だった。こんなところで、日本語がラジオから飛び出すとは、思わなかった。

7月24日 晴のち雨

朝は、キッチンおじさんのアリが用意するいつものプランタンという小麦粉をあげたのと、お茶である、テントの外は、ひさしぶりに天気がよくなりそうである。今日から荷上げが始まる。河合・八木2名が先に出発する残りの連中で20Kgの荷をかついで出発。

氷河といっても、上に石ころがのっていて谷あり山ありである。おまけに、川が氷河の上を流れているので、最短ルートを見つけるのが大変である。僕あっち、君むこうとあるくのだが、めんどうな所だ。アイスフォールの入口で河合に合う、八木1人がルートを捜しに行っていた。めどが立ち引き返してきた。この入口あたりをデボ地として、荷を、置くことにし、八木と吉田の2人が、アイスフォールの左岸を登って上を見に行く。途中落石がひっきりなしにある所を通らなければならないが、わりと簡単に上まで上がった。と思ったが、そこは第一アイスフォールの中段であり、さらにその上に上段と、第2アイスフォールがある。先は実に遠い。

BCに帰るとまた雨が降ってきた。今年の天気はいったいどうなってるんだろう。いいかげんに雨が止んでもいいのに。それに早く天まで雲がなくなって、ドレフェカルの全望が見えないだろうか。

7月25日 雨のち晴

朝から冷たい雨、連日朝6時頃は氷点下である。だが雪は降らない、冷たい雨がしとしとと降る。今日は行動中止、トランプばかりしている。

夕方、とつぜん雪が切れ、K6が見える。

7月26日 雨

今日こそはと思って外に出ると、やっぱり雨。うんざり。荷上げがおくれるとかで、カッパを着て荷上げに出発。だいたい近道がわかったので2時間ちょっとでデボ地へつく。この日河合は、テントに残り、持ちまえの手先でトランシーバーを修理、遠藤は腹痛で休み。Drは連日の下痢のせいかすっかりと、見ちがえるくらいにスマートになった。

7月27日 雨

いいかげんにしろ、と言いたいくらいの雨が降り続き、本日もトランプの日。

午後になって空の様子が今までとはすっかりと違って雲が流れて宵空を出してきた、これこそ晴れる兆しと喜ぶ。

フーシェよりポーター2人が、野菜、卵、ニワトリ4羽を持って上がってくる、夕食はとり肉のからあげなど、ひさびさのごちそう。

7月28日 快晴

ついに待ちに待った快晴の日が来た。全員で荷上げ、花井と吉田は先日達した、第1プラトー中段に上がってキャンプし、明日上部偵察の予定となる。いろいろと持って27Kgにもなる。重い重い。他の者もこの中継キャンプまで、10Kg位持って上がる。ドレフェカルが背空の中にそのどっしりとした白い姿を浮かび上がらせている。だが遠い。まだまだ時間がかかるのだろう。この中継キャンプからはK7が形よく見える、すばらしいながめである。この日、 α 米でトリカマメシを作ったなつかしい味である。

7月29日 快晴

1度暗れると天気は続くものである。10Kg程の荷を持ち出発、第2アイスフォールの前のプラトーは、広い。大きなクレバスも口を明けている。左にK6から続く山があり、雪崩が、ひっきりなしに落ちている。第2アイスフォールは中を行って見るが、氷は適当な固さで、けり瓜で快調に登る。しかし、クレバスがひどく、細い厚みのないブリッジを通らなければならず、結局このルートは、荷上げルートにはならなかった。ここを登りきれば、第1キャンプ予定の所である。ついにドレフェカルを目前にとらえた。左の稜線は明らかに使えそうもない。こんなにも、私達の登ろうとする山の形が良いなんて思わなかった。パキスタンの濃い青空によく似合った山だ。中継キャンプに下りてくると。下のデボ地にテントがあり、八木と毛利がとまっているとのこと。明日はデボ地とこの中継キャンプをピストンで荷上げすることになる。

7月30日 快晴

良い天気の中、上がったり下がったり。吉田は不眠を訴え、調子が悪い。残りの者がBCを出てこのデボ地へやってきた。明日で、荷を全部中継キャンプへ上げるとのことである。

7月31日 晴れのち曇り

この日も荷上げ、全員が中継キャンプに集まり3張のテントができた。ここで、日中は水が手に入るのがずいぶんと助かる。

午後から絹層雲が出てきた。

8月1日 曇り1時雨

日本を出て、もう1ヶ月がたった。いや1ヶ月でここまで来たといった方がよいのだろうか。やはりかなり運がよいのだろう。このペースで早く頂上へ全員でと思う。

第2アイスフォールのルートは右はじの、ルンゼ状の所とし、フィックスザイルを張り、ユマールで上がることにした。

夕方に、大粒のヒョウが降った。

8月2日 曇のち雨

予想通り天気が悪い周期へと入ってきた。遠藤・吉田以外の者が、荷上げ。その後上部プラトートを偵察するが、ヒドクレバスの多さに足がすくむそうだ。午後より雨足が強くなってきた。

8月3日 雨

雨が弱まった所をみて、石村・遠藤・河合・吉田で荷上、ミズレにかわってきた。雨の中動いても楽しくもなんともない。

8月4日 雨

停滞

8月5日 雨・ときどき曇・1時雪

ぐずついているが、いいかげん天気も良くなるということで全員でC1へ移動となる。全員25Kgの荷を持たされる。フィックスザイルの所は、ユマールより手の方が楽とかいわれて、ひどい目に会った。ともかく全員、C1へ移動。C1が建設された。そのうちひどいみぞれ様の雪が降ってくる。C1に入ったとはいえ、回りは何にも見えない。だが、いよいよ明日から本格的な山登りが始まることになったのが実感となってきた。あと、約2週間というタイムリミットはあるけれど。



V 頂 へ

毛利立夫

8月6日

一週間の予定が二週間かかり、やっとC1に荷を集結することができ、さっそく稜線へのルート偵察に出発した。北稜から第2プラトーの中央にのびる尾根にプロさん、キンペイさん、清野、その北側の沢型に花井さん、吉田君、僕が行く。石村さんとドクターは残した荷をとり第二アイスファールの下へ行く。

第2プラトーは新雪におおわれ、僕らは氷河上で初めてのアンザイレンをした。広い雪原をゆっくりと登って行くのがとても気持ち良い。回りに見えるのは、荒々しくも美しい山ばかりだ。河合パーティと別れ、沢型を100m程登るとかなり大きなクレバス帯にぶつかった。ジッヘルをして吉田君が中央のスノーブリッジを行くが、足を突込み恐怖の面持で戻ってきた。しかたがないので右岸までトラバースして、クレバスのせまくなった所をわたることができた。再びコンテで登るが日射により雪がくさりだし、ラッセルに苦勞する。右岩の急斜面、つまりプロさん達が登っている尾根側から落ちてきたデブリが気持ち悪い。傾斜が急になり出し、登りきった所は巾20m程のクレバスのふちだった。渡れそうなのは反対側の左岸ぞいだけだ。雪がちらついてきたし引き返すことにする。下を見ると今歩いてきたトレースが、小さな雪崩に埋まっている。「たいしたやつじゃないだろう。」花井さんは言ったが、近づいてみると、人間の背より大きなブロックがゴロゴロしていた。帰りは雪がくさり、ラッセルでえらく消耗だ。尾根隊と別れた場所にドクターと石村さんが見える。石村さん達の所に早く行こうと、トレースをはずれた僕は、アッと思う間もなく、ヒドンクレバスに左半身を吸い込まれた。石村さんが笑っている。変な体勢で仲々起き上がる事ができずもがいていた。しばらくすると尾根隊も帰ってきたがやはり稜線に出ることは出来ず、見通しも立たない。皆初めての高度でかなりまいっている。特に清野がひどい頭痛をうたえている。明日は隊長と比較的元気の良い花井さんと僕が2日ばかりで稜線をめざす。

8月7日

うす暗いうちにスキーをはいて出発する。尾根をとるか沢をとるかまだわからないが、とにかく沢にルートを求め登って行く。シールをきかせ昨日の倍ぐらいのスピードで一つめの大クレバスについた。ザイルもつけずに中央のスノーブリッジをわたり二つめのクレバスの右端をめざし一直線に進む。

こういう場所ではスキーはすばらしい威力を発起する。クレバスは右端で切れ、50mぐらいの氷壁になっている。そこでシーデポをして、僕がトップでとりついた。途中アイスハーケンを1本たたき込み、上に出る。氷は薄い層で、その下が空洞になっている所があり気持が悪い。そこからはゆるい傾斜が稜線まで続いている。コンテで左岸を進む。一ヶ所急になっている所を花井さんがトップでスタカットで登る。そこで写真を撮ろうとカメラを出していると、花井さんの大声が聞こえた。見ると雪崩が下に落ちて行く。幸い花井さんのいる所はくずれなかったがあぶない所だった。これで2回目だが日本の感じで雪崩の判断ができないし、ある程度急でも行ってしまわなければならない所がある。あとは稜線になんか達することができた。尾根を見ると、昨日の河合さんたちの引き返した少し上の岩峰からは、平に稜線が続いている。クレバスや雪崩のことを考えれば尾根の方がルートとして良いだろう。稜線に出たところで荷上げをやっている下の連中と交信をする。

「ただいま稜線に達しました。どうぞ。」

「それは良かったですね、稜線の状態はどうですか。どうぞ。」

「えー、頂は真近に見えこれから頂上アタックにむかいます。どうぞ。」

「なにー」

冗談をいった時の下の連中のあわてぶりは面白かった。帰りは快調にスキーを滑らせ、2日の予定だったが1日ですんだ。下の5人はC1から尾根ルートの分岐まで荷上げをした。今日は全員がそこに泊まる。

8月8日

新しい高度での2日間のフル行動に僕と花井さんは疲れきっていた。今日は尾根上にC2を建設するだけの半日行動なのでがまんして出発する。尾根に上がるには、南側に少しまわりこまなければならないが、南側に少しまわりこまなければならないが、その部分がクレバス帯になっていてフィックスロープを張った。尾根上5400mの少し岩の出ている地点にC2を作り、石村、遠藤、吉田、清野はくだっていった。シュラフや靴を外にほし、僕らも岩のところで昼寝をしながら明日からのルート工作のことなどを考えていた。デポ地に4人が着き、さらにC1に荷をとりに行く2人が出発するのが見えた。そろそろ食事のしたくでもするかとストーブに火をつけて雪をとりに外へ出るとC1からデポ地にむかう人間が1人になっている。それもかなりあわてた様子で、「ホーホッホッホッホー」という緊急コールをしている。何かあったのか、デポ地につくと今度は2人がC1にむかってスキーを滑らせていく。僕らは皆外に出てトランシーバーのスイッチをONにして旗を振った。2人は途中のクレバス帯で止まり、かたまって何かやっている。もうこれは明らかだ。だれかがクレバスに落ち

たんだ。カメラの望遠レンズで見るがやはりはっきり見えない。30分もたっただろうか、1人がデポ地に向かって歩きだした。しばらくして後を追う2人がはっきり確認できた。緊張して凝視していた僕らもほっと安心した。やがてデポ地についた3人が僕らのふる旗に気がついたのかトランシーバーの交信を始めた。

「こちら石村です。えーと、だまっていようかと思いましたが見られていたのではしかたがありません。落ちたのは僕で5m程でとまりました。ザイルをとりに行った清野君と遠藤君に助けられました。けがはありません。」

スキーをはいて、通り慣れた道をザイルも持たずに鼻歌まじりで歩いていたのだ。油断が招いた事故という以外無いだろう。こんな所で死んでしまっただけは笑い話にもならない。しかし石村さんというのは悪運の強い人だ。今までに国内で何回かの事故を起こし、その都度まわりの人間が死傷している中、殆んど無傷で帰って来るのだ。今回の遠征でも僕らはつきにめぐまれているようだ。「悪運パーティー」と自称しているが、山登りもつきにたよってはいけませんが、またつきに見離されたらだめだということも確かだろう。

8月9日

6:30に出発する。C2から尾根をあえぎながら登る。すぐ近くに見える岩峰に出るまでのつらいこと。そこからナイフリッジの吊尾根を歩き2つ目の岩峰に出る。岩峰の登りはちょっと悪いのでザイルをフィックスする。2つ目の岩峰からはほとんど登りの無い広い尾根が稜線まで続いている。上を見ると巨大な雪庇が東側に張り出している所まで急な雪壁になっている。とにかくザイルを結びとりついてみる。花井さんがトップでその冰雪壁を50m程登る。確保の場所を作るべくバイルをふるっていた花井さん、突然「おーい！へんなロープがあるぞ！」とどなる。僕等は驚いてどなりかえした。「どんなロープ？」「クレモナみたいなロープでハーケンに結んであるぞ」、こんなことがあるのだろうか。この山には記録がない、誰もアタックしたことがない完全なバーजनだと思っていたのに。要は頂上に登って登っていなければいいんだ。しかし頂上に何かの痕跡があったらどうしよう、複雑な気持ちになる。しかし今は登るしかない。気をとりなおしてザイルにユマールをセットした。2ピッチ目、花井さんトップで上にある岩の西側をまく。20m。3ピッチ目、欣平さんトップでそこから上にあがる。20m。4ピッチ目、僕がトップで少しゆるくなった冰雪面を40m。

そこまでフィックスロープを張り、おいてきた。結局下から見る肩の上までは達することができなかった。河合さんは不調で、ザイルを送り出して見物していた。

皆なんとなく沈痛の面持でC2に下った。C2には今日下の4人があげた荷がおいてあった。下の

岩峰からC2まできれいなスキーのシュプールが残っていた。きっと清野のものだろう。トランシーパーの交信で残置ロープのことを告げるとさすがに石村さんもショックはかくせなかった。しかしここまで来て帰るわけにはいかない。このことはしばし忘れて登り続けるしかない。明日は同じ4人でルート工作、下の4人は荷上をしてC2に泊まる。つまり全員C2に集まることになる。

8月10日

6時に出発し、きのう張ったフィックスロープを登り9時に最高倒違点に着いた。そこから欣平さんトップで60m登るがまだ完全に肩の上には出ない。そこから花井さんがトラバースぎみに登り出す。ジッヘルしている僕がザイルをからめてしまい、ほどこうとして引っぱった拍子に、それがさしであったピッケルにひっかかり、すっぱり抜けて着けてあったザックがはずれてしまった。ザックはあっという間に見えなくなり、はるか下のチェリー谷に落ちていった。ザックには補助ロープ、カメラなどが入っていた。幸い登攀に決定的な支障をきたすような物は無かったが、僕は自分のミスにがっかりしてしまった。その後、雪稜に200メートルのフィックスロープを張り、今日の仕事を終わった。稜線自体の傾斜は落ちたが、細いナイフリッジで西側に雪庇が張り出し、僕らが登っている東側はすごい傾斜で谷に落ちこんでいるので仲々はかどらない。帰りは雪が降り出し、そろそろ悪天周期に入ってくることを示している。C2では石村パーティにコーヒーでむかえられた。

8月11日

天気はやはり芳しくない。不調のプロさんを残し7人で稜線に上がる。石村・花井・清野・吉田の4人はルート整備と高度順化のためにフィックスロープをたどり上に登っていく。僕と欣平さんとドクターの3人は、C3予定地の雪壁の下の広地にイグルーを作る。気温が高いのであまり快適そうではないが、4人ぐらい寝られるやつができた。これは日本を出発する前から計画に入っていたものだ。ふだん北海道の山を登るセンスが、どの程度通用するかをためすというのが表むきの理由だが、実際はテントが足りずしかたがなかったのだ。貧乏隊のつらいところである。

天気は急速に悪化しだし、雷をともなって激しく雪が降り出し上に登っていた4人はあたふたと下ってきた。できたばかりのイグルーで雷が止むのを待ち、C2に下った。

8月12日

朝から雪が降っている。せっかく荷上げた食糧を食いつぶす事は無いので全員でC1に下った。C1では皆やたらと小便が出る。高度障害が出ていないとは言っても、やはり体は完全ではなかった

のだろう。食糧はあと10日分ぐらいしかない。あと一週間で結着をつけなければならない。

8月13日

休養のため停滞する。もちろん天気は良くない。僕自身ははっきりと登頂の確信はまだ持てないが、「どんなことがあっても登頂する。」という石村さんの意気込みと、「登れるにきまっとるだろ。」という花井さんの樂觀論により、たぶん大丈夫だろうという程度の気持になってきていた。とにかくあと数日間全力を尽くし、そのあとは疲れきってヨタヨタと山を下ることになるだろう。

8月14日

私用で先に帰らなければならない河合さんに見送られてC2へと登っていく。天気は完全には回復していないがそろそろ好天周期に入っても良いところだ。明日のルート工作は花井さん、欣平さん、僕で行なうことになる。いよいよ大詰になってきた。

8月15日

予想通りフィックスロープは雪の中だ。しかも風にたたかれかたくしまった雪で、ロープは雪庇の方に寄って埋まっている。それを掘り起こしながら進むのは一苦労だ。天気も完全に回復しておらず、結局70メートル程フィックスをのぼしただけで、ロープ、スノーバーなどをデポして下った。イグルーの所には、荷上パーティが張っていったテントと荷物があり、滑野が残っていた。ここをC3として4人で泊まる。

8月16日

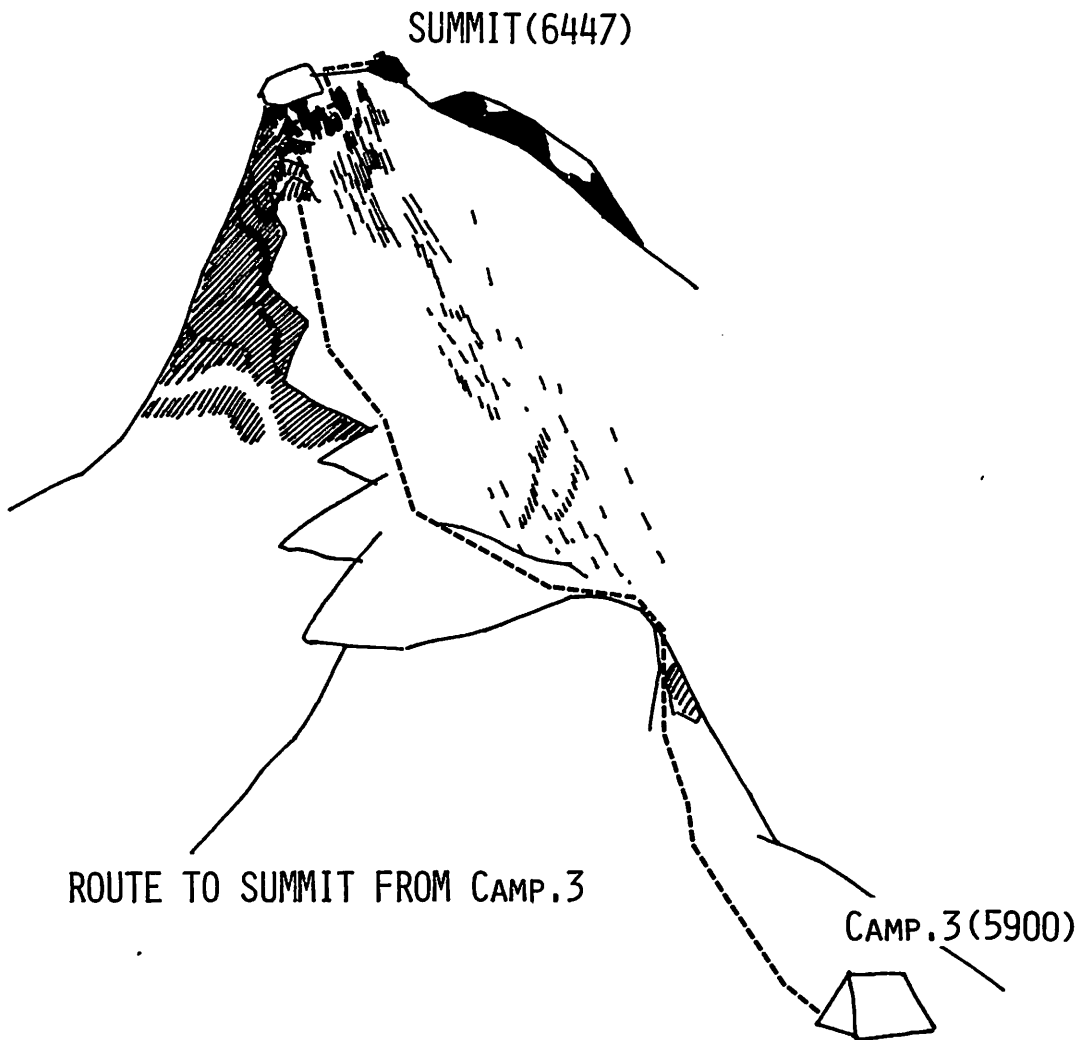
今日はできれば登頂するというので3時に起き5時に出発する。前日の終了点には2時間程で着いた。そこから欣平さん、滑野、僕がかわるがわるトップに立ち雪稜にザイルを延ばした。慣れてきたとはいえやはり緊張する。10ピッチ程で頂上岩稜にたどりついた時は昼すぎになっていた。そこからは雪や氷はきれいだが、岩にはめっぽう強い花井さんがトップで取り付いた。かなりむずかしいようで時間がかかる。ハーケンやフィックスロープも無くなってきたので100m程登って引き返すことにした。他の3人が途中まで登ってきているのが遠くに見える。C3に帰りついたのは6時をまわっていた。石村さんたちにジュースとお茶を飲ませてもらいながら頂上岩稜のようすなどを説明した。予想していた事だが最後に現われた最大の難関である。あと200メートル位であろうが、どの程度難しいのだろう。最後の最後に難かしすぎて登れないような事になったらどうしよう。夜の話

し合いで明日ドクターを除く6人で頂上アタックをすることに決まった。天気の周期と残りの食糧の事を考えると最後のチャンスになるだろう。6.000メートルをこえてのフル行動はやはりこたえた。シュラフに入ると明日の事を考える間も無く、深い眠りにおちこんでいった。

8月17日

朝4時に起きる。すばらしい快晴だ。マッシュルーム・チョゴリザ等は淡いピンク色に染まりひととき美しい。フィックスロープが足りないので下の尾根に張ったやつを回収しに石村さんと清野が下って行く。僕と花井さんは先頭で登り出た。疲れているはずの体がうのように良く動く。休みなしで3時間程登り続け前日の終了点に達した。そこから花井さんがトップで登り出す。岩に雪と氷がいやらしくへばりついている。おまけにもろい岩があるのだ。はがれた岩は東側の氷河に音も無く落ちていく。ザイルは仲々延びていかない。花井さんが1ピッチ60メートルを登り切る頃には全員が僕の所に登ってきていた。2ピッチ目は欣平さんが西側をまき気味に氷のついた壁を登る。そこから上は巨大な氷のひさしがあってまっすぐに登ることはできない。西側の壁をトラバースしてから上がらなければならない。ハーケン類は底をついてきて、ランニングピレイに使ったものはみんな回収して登ってきた。再び花井さんトップで行く。見るからにいやらしそうな所で苦労している。それぞれ不安定な場所でセルフピレイをして待っている5人はかたずを飲んで花井さんを見ていた。こうして待っていても北海道の積雪期と違いちっとも寒くない。5月頃の山という感じた。やがて花井さんの姿が視界から消えしばらくすると「抜けたぞー」~~／＼~~という声が聞こえた。やっと頂稜に達したのだ。この時になってやっと登頂の確信が持てた。頂稜に上がると最高点は50メートル程奥にある。花井さんが「毛利行け。」と言う。ありがたく先に行かせてもらう事にする。ものすごく細いリッジで一步一步慎重に足を運んだ。そっと出した足がズボッと無抵抗にもぐった。その穴を見るとずっと空間が広がっている。雪庇の上だ。あわてて右に寄ろうとするが、右は壁になって切れ落ちている。そこまで欣平さんに来てもらい再び登り出す。最後に5メートル位岩を登ると頂上だった。興奮で手がふるえる。後では8ミリを撮っている人が手をふれとかさげんでいるがうわの空だ。ザイルをセットして後続を呼ぶ。全くせまい頂上で、少し動くのも恐ろしい。まわりは、さえぎるもの無くすばらしい眺望で、ベースキャンプから見上げていたK6も肩を並べているかに見える。K2、ブロードピーク、チョゴリザと見慣れた山も皆低く見える。まずは花井さん欣平さんが登ってきて握手をする。持ってきたポロポロのAACHの旗とリエゾンに頼まれたパキスタン国旗を出し写真を撮る。風が無いのでちっともはためかない。おまけに寒くないので素手にくわえたばこだ。あまり迫力ある写真はできそうにない。交代で残りの3人が頂上を踏み、僕らは先に下降する。すでに夕暮がせまっていた。美し

いアーベントロートから満月の月夜に変わっていく中を何度も足をとられながらひたすら下っていった。C3にたどり着くと、ドクターが熱いスープやお茶で出むかえてくれた。登頂しているのが良く見えたそうでいっしょに喜こんでくれた。最後の石村さんが帰ってきたのは9時をまわっていた。あらためて皆と握手を交わす。テントの外に出ると雪面が月明りを浴びて淡い光を放ちこの世のものは思われぬ程美しく見えた。



VI エピローグ

清野啓介

8月18日

「5時か！」一時シュラフの中から飛び出しそうになる。だが待てよ、今日はそんなに急ぐことはないのだ。だってもうお仕事は終わったのだから。再びシュラフの中に体をうずめ目を閉じる。けどなんだか寝られない。皆もシュラフの中でガサゴソやっている。今日は9時迄寝ていてもいいのだけれど……。おさむさんが早々と起きだし、開口一番「お茶を沸かそう。」ビスケットをかじりながらお茶をすする。体の半分はシュラフの中に入ったまま。体のふしぶしは昨日一日中フィックスロープにぶらさがっていたせいかわいけど、ヌクヌクとして気分がいい。日本の山にでも登っている気分になる。このままテントをたたんで一気に里まで下り、銭湯に行きさっぱりして、天どんでも食べれば、汽車で札幌まで帰れる様な気がする。誰だったか、Room note に「自分は何処の山（そこが北アであろうと日高であっても）に行っても、ただ漠然と山に登っている感じしか持てない。そして、それが将来ヒマラヤに行っても同じじゃないか・・・」などと書いていた罎がいたが、何処に行ってもテントの中の莫迦話は同じみたいだ。いつまでもウダウダしていたいのだけれど、お日様に追いつかれてやっと撤収を始める。いらぬ物いる物。とにかく何んでもどンドン捨てる。僕ら貧乏性だから何んでもかんでも持って帰りたいのだけれど、遠征隊は撤収の時どンドン捨てなければいけないのだそうだ。一応整理のついでとところで記念撮影。皆キタネエ顔している。けど今までは違ってスッキリした顔だ。気分良くキジを打った後の様！あとは皆思い思いに下り始める。大頭は昨日アタック用にフィックスをはずしてしまったのもう一度ザイルを張った。C2のテントを回収。初めてこの高度に来た時は数十メートル進もうにも進めず苦勞したが、今では息切れさえしない。僕とトロン隊長とキンペイさんはC2の下のフィックスからスキー。連日の好天で隠れていたクレパスがポッカリ口を開けている所が多くなったが、僕らの華麗なスキー術の前には屁でもない。トロン隊長の落ちたクレパスなどは完全にスッポンポンの姿であった。こんな所に落ちて助かったのだから悪運の強さを僕はただただ感心するだけだった。C1は、回りの氷が解けて数十cmも盛りあがっていた。早々に夕食の支度、上部キャンプに上げなかったスペシャル食や余り物を食べあさり即寝る。

8月19日

空はどんよりと曇り始めた。僕らは好運だったのだろう。食料もフィックスロープもギリギリ、そして天候も好天の周期一っばいを使って登頂できたのだから。ゴソゴソ起き出して整理を始める。こ

こでもどんどん放棄する。第2アイスフォールのフィックスも雪が解けて様子がずいぶん違っている。それに一人あたり30Kgの荷をかついで細いロープに身をたくすのは気持ちの良いものではない。第1アイスフォールの取り付きはあいかわらず落石がすごい。荷上げの時は祈る様な気持で落石の間をぬって何回も往復した。このいまましい落石帯さえ過ぎればBCはもうすぐなのに。アイゼンをしっかり着け、間合をうかがって一気に走り抜ける。ここさえ抜けてしまえば、あとは快調にBCまでとぼすだけだ。最後の難関サイドモレーンは皆思い思いにルートを取る。抜け出て懐かしのBCが見える地点まで来たら、ハムザー・アリとコックのアリじいさんが迎えに出ていた。ハムザーは先に下ったPro副隊長から話を聞いて昨日フーシェから上って来たのだそうだ。さかんに「goodナ！goodナ！」を連発している。久々のBC。しっかりとした地面と緑がうれしい。お茶をすすり、しばし地面の感触を味わう。「土てのはいいなー！」夕食はハムザーがかつきあげて来たバビジョンで豪華にやる。とっておきのウイスキーで再び登頂祝い。疲れと久しぶりのアルコールですぐ酔っばらってしまった。ハムザーもすこしばかりおこぼれを頂だいして酔っばらい、奥さんののろけばなしを始めた。「○○○○、sleep goodナ。」全くいい気なもんだ。僕らも初恋談議に花を咲かせる。明日毛利はキンペイさんと一緒にポーターを迎えにフーシェまで行かなければならないのに、そんなに酔っばらって大丈夫なのかしらん？

8月20日

朝、早々とハムザーが毛利を起こしに来た。「モーリ、モーリ、フーシェgoナ!!」毛利とキンペイさんは個人装備をまとめて元気にフーシェに向って下っていった。送り出したあと、皆もう一寝入り。食事はキッチンテントに行き、思い思いかってに食べる。雲が低くたれこめ、時々小雨がパラつく。完全に悪天の周期に入った様だ。この天気でお花畑の花も皆しゃぼくれて見える。

8月21日

小雨がパラつく中をポーター達が昼頃元気にやって来た。まさか今日はやって来ないと思っていたので荷分けにてんやわんやの忙しさ。なんとか荷をまとめスパンセルまで下る。

8月22日

フーシェに着く。毛利とキンペイさんはフーシェの村人にだいぶ親切にしてもらったらしい。夕食はニワトリを買ってスキ焼風ナベ。夜、ポーターの家に招待される。

8月23日

チェリー谷の出合からドレフエカルの頂きが雲の間に見えかくれしていた。「もう一生この山を見ることもないかもしれないな。」来る時の三日分を今日一日でタリスへ。全員到着したのが夜の8時近くになっていた。

8月24日

おさむさんとキンペイさんがザークの手配の為早出していった。ザークの渡し場で賃金のことでポーターと一悶着。流石のトロン隊長も疲れてしまって少々ナゲヤリ気味。結局、四人のポーターをカパルーまでつれて行くことにする。シャヨーク川は来た時よりもだいぶ水量が減ったが、それでも僕らのザークは快調に流された。カパルーのレストハウスでリエゾン・オフィサーが待っていた。ラマザーンの断食中とかで、やくざなポーターとは違って敬虔なムスリムのリエゾン・オフィサーはだいぶやつれた様子だったが、再会を喜び、登頂を祝ってくれた。

8月25日

早朝ジープで一路スカルドへ。もうアプリコットの季節は終って道中の村々では子供達がリンゴを売りに寄ってきた。そういえば風もなんとなくさわやかな秋風という感じだ。スカルドに着き、例のレストハウスの横にテントを張る。私用で一足先に下山したプロさんには予想通り追いついてしまったが、明日の飛行機に乗れるということだ。トロン隊長はこの日の夕方からマラリアが発病。そして四日間のフライト待ちをして、悪感発熱で苦しむ隊長をつれて思い出の多いパルチスタンの地をあとにしたのは30日であった。

そして、9月2日ラワルピンディの中華料理店で晴れて解散パーティをし、吉田君は北京回りで日本へ直行、ドクター、おさむさんと毛利はカラチへ、僕はアフガニスタンへ、キンペイさんとトロン隊長はインドへと思いつきの場所に散って行った。



村の女子。

食 糧

八 木 欣 平

食糧計画は、大きく、キャラバン食、BC食、登攀食(イ・ロ・ハ)の3種にわけ、キャラバン中は原地。BCでは朝夕を現地食、昼をビスケット主体の行動食。登攀食は殆んどを日本食という風にした。原地食は小麦又は原地米主体で、チャパティやブランタン、及びカレーやタルスープといった風に原地購入品でまかない、日本食はお米主体の雑炊もしくは白飯、そして高所に於ては高所ラーメンや、ワンタッチライスといったものを食した。

計画段階ではキャラバン食14日、BC食6日(行5、停1)、登攀食21日(行14、停7)、予備4日、の計45日分の準備をし、その他、スペシャルBOXと称して、若干の嗜好品(缶詰やジュース、粉醤油の類)を持っていった。総重量は約350Kgであり、そのうち150Kgを日本から輸送し、残りは全てラワルピンディやキャラバン途中で購入した。

(キャラバン食)

原則的には原地食であったが、夕食は適当に乾燥醤油等を用いて和風の味つけを試みた。朝は最らブランタン(チャパティを油で揚げたもの)と紅茶と玉子。キャラバンが不規則であったため、昼はまとまって食えず、ラーメンの丸かじり等をやっていた。皆体調を崩し、チャパティが口にあわず、夜は主に米を食った。その為、小麦の消費量が非常に少なく、かなりの量が余ってしまった。計画段階では、主食が米もしくは小麦で、1日1人当り500g、蛋白質として、現地の乾し肉を考えていたが見あたらず、結局ラワルピンディでコンビーフの缶詰を購入、キャラバン中に鶏卵(1R/1コ)や、ニワトリ(25~40Rs/1羽)を買って補った。その他、野菜もラワルピンディで玉ネギやジャガイモを購入、途中の村でモロ(カブの一種)等を入手し使用した。

(BC食)

キャラバンの延長と考え、朝はブランタンと紅茶。夜も全て原地購入品でまかになった。主食は朝150g/1人、夜200g/1人。野菜は日持ちするジャガイモや玉ネギ、肉はパキスタン製のコンビーフをラワルピンディで購入し、使用した。昼は行動食で、ビスケット(パキスタン製)200g。ノーベンとして、キャンディやナッツの類、それに日本よりドライソーセージを持参、使用した。

(登攀食)

屋メシ及び、停滞食の一部を除いて、全て日本で準備した。イ、ロ、ハ、の3種を準備し、そのうちC1以降パーティ分散の戦術に対応できる様に3人、2人×2、1人、の3つに区分けて梱包し

た。(結局繁雑になっただけで、隊員の不評をかったのだが。)

登攀食イは、 α 米主体の雑炊(朝130g/1人、夜170g/1人。実際には白飯にして食うものが多かった。)登攀食口は、朝高所ラーメン、夜はワンタッチライスという高所キャンプ用。登攀食ハは、停滞用で、朝夕は登攀食に準じ、昼は小麦粉を適当に料理するというものであった。昼飯はイ、ロともBC食と同じく、ビスケット主体のものであった。量及び質に関しては、国内山行で食うものより少しましなものを目指し、遠征だからといって、特別に豪華なものをもってゆかなかった。今から思えば、文句も言わず、隊員の皆はよくうまそうに食べてくれたものだ感謝せざるを得ないような気もするが。

今回、日本からもっていったもののうち、 α 米の半分量及び、乾燥野菜、乾燥肉を、北大農学部 of 山口淳一OBの御好意で乾燥機を使用させていただき、ROOMの1~3年目の協力もあり、作製利用した。 α 米は半分量は市販のものを使用したのだが、我々の作ったものも、味、質に於いて、決して劣るものではなかった。乾燥野菜は、玉ネギ、長ネギ、ホウレン草、ニンジン、ジャガイモの5種を作ったが、やはりジャガイモとニンジンは、もどりが悪く、不評であった。乾燥肉は今回初めての試みであったが、札幌食肉流通センターの御好意で、ブタ肉の赤身をゆずっていただき、加工した。結果は非常に良く、料理に、酒のつまみにと好評であり、今後の遠征で使用をすすめるもののひとつである。

ラーメンの使用については、沸点の下降による“もどり”の悪さという点で、計画段階より賛否両論があったが、東洋水産札幌工場の御協力で、カップラーメンの中身をゆずっていただけることになり、高所ラーメンと称し使用したが、これも又、好評であった。尚、同工場より、乾燥粉抹醤油の寄附もいただき、非常に有効に使用できた。

その他、粉ミルクを雪印乳業、カルパス(昼飯のネーベン用)を雪印食品の御好意でゆずっていただき、大いに利用させてもらった。東京での食糧購入に於いても、ダイエー中目黒店の御好意で廉価でゆずっていただき、我々学生隊としては、非常に助かり、この紙面をかりて、感謝の意を表させていただきます。

以上が、食糧報告の概要である。最後に食糧係の方から一言いわせてもらう。我々が目指したものは山であり、登山が主体であることにはちがいない。しかし、だからといって、金にものをいわせ物資を不必要に持っていくことには賛成しかねる。即ち、いかにギリギリの線で成功をおさめるか、それが我々のこれからのやり方だと思う。食糧に関して言えば、今回そのセンスが生かされたかどうか、

むしろ失敗した部分も多かった様な気がする。しかし、今回の良かった点、それぞれ次の計画には大きく役立つものと思っている。是非とも参考にして欲しいものである。



装 備

花 井 修

計画当初より、装備は従来の積雪季に使用するものを使い、それを越えるものは持っていかない方針であったが、いろいろな報告書を参考にフィックスロープやスノーバー等は使用することになった。

1) 個人装備

従来の積雪期装備である。ピッケルの他に各自アイスパイル、又はアイスハンマーを1本ずつ携行したが、全員に必要であったとは思えない。アイゼンは全員、出歯の12本爪を使用した。心配されたアイゼントラブルは無かったが、ツアツケの摩耗が激しく、途中でヤスリで研いだりした。ゼルプストは、出発前その安全性について問題となったが、胸型腰型、パラシュート型と各自の選択にまかせた。中継キャンプ以上では、各自にユマールを1台支給した。ユマールはフィックスロープを張ったルートの上昇に有効であったが、ロープに雪が付着すると若干滑り易くなった。行動中の衣類は道内の6月山行程度のものであり、ジャージのトレーニングパンツを使用するものが多かった。春山以上の防寒、防風衣類の必要は全く感じなかった。登山靴は湿雪に対する濡れに注意すればどんなものでもよかった。

2) 登攀装備

登攀用ナイロンロープは、9mmと8mmを4本持参し、内3本を最終的にはフィックスして残置した。防水性の充分でない1本のロープは、ルート工作中上部にデポした際、凍結してしまった。11mmの太さのロープの必要性は感じなかった。

フィックスロープはダンライン8mm、10mm各々600m、計1200m持参し、全て使用した。C3まで約200m、C3以上約1000mである、ダンラインは耐久性、低温時の強度等に疑問が残り、摩擦に弱いという欠点があるが、防水性に優れ、比較的軽量(8mmで30g/m)で安価であるという利点がある。長大で急傾斜の続く岩壁ルートとか、ユマールによる頻繁な登下降を強いられる様なルートでは、ダブルで使い登下降別々のロープを使用するなどの工夫が必要となろう。ロープの経に関してはルートの状況がそれを決定するが、我々は8mmを比較的緩傾斜の雪氷ルートに、10mmを急傾斜で下降時に特に荷重の重く担かる様なルートに使用するように配慮した。長さに関しては、C3以上ピークまで全ルートにロープを固定したため、不足をきたし、頂上アタックの日に下部

のロープを回収して使用した。ロープの支点には各種ピトンとスノーバーを使用した。基本的な支点は岩に確実に打ったピトンでとり、中間的支点として氷にはアイスピトン、雪にはスノーバーを打ちこんでいった。氷の状態は良好で、ピトン打ち込みの際に表面の氷が剝離することもなく、打ち込んだ後のピトンのゆるみも少なく、比較的安定していた。残置したピトン類は5.0本以上に達した。

スノーバーは74年のマッキンレー隊と同一規格のものを、24本(600mm、800mm)を作製し、18本を使用した。バーにかかる力の方向を下方にひかれる様に注意したが、あくまで中間支点としか使用できなかった。また、氷には全く歯がたたなかった。ボルト、アブミ、サブロープ等は使用しなかった。

3) 露営具類

ベースキャンプ以上の3つのテントは、全てドーム型である。フライシートは必需品であった。ツェルトはキャラバン中とベースのキッチン用テントに使用しただけである。

グラウンドシートとしては、薄いウレタンマットを使用したが、氷上では2枚以上必要であったし破損し易かった。

ストーブは全て石油コンロで、日本より5台、パキスタン製1台の計6台をもっていった。石油の質が思っていた程悪くなく、注入時にフィルターを使用したためか、調子はおおむね良好であった。石油は全てスカルドで購入したが、キャラバン中はほとんど焚火であったし、上部キャンプでも水がとれたので、かなり量が余った。石油用のポリタンクはラウルピンディで購入したが、質が悪く特にフタの部分の破損がひどかった。

ナベ、カマ類もピンディで購入したが、日本からコッヘルセットを持参した方が軽くて便利であったと思う。圧力ガマは日本製1台、パキスタン製1台と2台用意したが、パキスタン製の方は、キャラバン中圧力弁が破損して役に立たず、日本製も重くてベース以外では使用しなかったし、又その必要もなかった。

4) その他の装備

○個人装備の予備として10Kg弱の装備を用意したが、ゴーグル、スパッツ等の若干の装備を使用しただけであった。

○トランシーバーは大型1台、小型2台、計3台使用したが、常時使用したのは小型2台だけで、大型のもの必要性は薄かった。調子は良好であった。

- カメラ類は個人装備とし、各種フィルムを支給した。インスタントカメラは、ポーター懐柔に有効であったが、最後にはリエゾンのバースディプレゼントとなった。
- テープレコーダーは、暇つぶしに有用だがテープが岩崎宏美と太田裕美しかなく、同じ歌ばかり聞いていた。リエゾン持参のパキスタン歌謡は聞くに耐えなかった。
- 高度計は故障して1度も正確な値を示さなかった。
- リエゾンに支給する装備は、登攀具以外レギュレーション通りであり、登山終了後も返却を要求しなかった。
- ポーターには、キャラバンルートの容易さを理由に何も支給しなかった。最終日にタバコとマッチを与え、写真をとってやってだけである。
- スキーは5台ベースに運んだが、使用したのは3台だけで、しかもC1からC2の間だけであった。またスキーがその能力を発揮する様な機会も場所も少なかった。クレバスに有効だ、という説は、クレバスを意識して歩いている時だけ正しいのだということを、隊長自ら立証した。

装 備 表

クライミングロープ(φ 9mm、40mナイロン)	3
クライミングロープ(φ 8mm、60mナイロン)	1
フィックスロープ(φ 10mm、200mダンライン)	3
フィックスロープ(φ 8mm、200mダンライン)	3
捨縄用ロープ(φ 6mm、50mナイロン)	1
ロックハーケン(各種)	30
アイスハーケン(各種)	30
スノーバー(アルミ合金・自製)	28
アブミセット	6
カラビナ	40
アイスハンマー	3
アイスバイル	3
滑車	2
ユマール	4
赤旗	60
トランシーバー	3

大型ラテルネ		2
温度計		3
高度計		1
冬用テント(ドーム型4人用)		3
夏用テント(4人用)		1
ツェルト(4人用)		3
フライシート(ドーム型)		2
スコップ(鉄2ジュラ1)		3
ノコギリ		3
タワシ		3
ナタ		2
石油ストーヴ(スベア4 現地製1)		5
ストーヴ修理具セット		4
ローソク	RWP	30
スイスメタ		10
圧力ナベ(和製1、現地製1)	RWP	2
ナベ(φ24cm)	RWP	3
ナベ(φ30cm)	RWP	1
フライパン(φ30cm)	RWP	2
コップェル(4~5人用)		1
食器	RWP	8
スプーン	RWP	8
フォーク	RWP	3
お玉	RWP	3
包丁	RWP	2
茶こし	RWP	3
缶切り・栓抜き	RWP	3
タオル		3
石油	RWP	80ℓ
ビニールシート		4

ラジオ		1
カセットテープレコーダー		1
バッテリー(単1)		50
バッテリー(単3)		100
プレイヤー		2
ドライバーセット		1
ヤスリ		1
針金セット		2
ビニールテープ		10
ボンド		2
速乾性ボンド		2
キリ		2
サンドペーパー		4
クギセット		1
木ネジセット		1
ビス・ナット(PB・M5・M8)		各4
カッター(大)		2
張網予備		6m
自在(ジュラ)		3
アマニ油		3
保革油		3
ポリタン(20ℓ石油用)	RWP	4
ポリタン(2ℓ水用)	RWP	10
テルモス		2
梱包用品		各種
計算機		1
タイプライター		1
鉛筆		5
ボールペン		5
レポート用紙		5

タイプ消し	1
定規	1
ホッチキス	1
ホッチキス針	2
マジックインキ	5
ロールペーパー	RWP 4.0
ティッシュペーパー	RWP 1.0
記録用紙	各種
双眼鏡	1

※RWPはラブルピンディで購入

会 計

河 合 範 雄

当初、遠征経費は原則として自費で賄なうと大言壮語しましたが、出発間際になって不安を覚え急遽寄付を募ることになりました。かなり短期間でありましたが別紙のとおり、多額の金額が寄せられました。御寄付を頂いた方々には、心より御礼申し上げます。

この様に、一事業の会計を担当したのは初めてであり、色々と予想の甘さと現実実際のギャップをまざまざと見せつけられ、背息吐息であったのが偽らざる心境でした。当初の予算では、自己負担で賄なえるはずでしたが、丁度寄付を頂いた分だけの額がオーバーしている計算となります。頭で考えるより実際はふくれあがってしまうのが、現実のようです。とにかく、現地で赤字にならず遠征を終えることが出来たのも、ひとえに御寄付のおかげであり、再度御礼を申し上げます。

とはいえ、我々のもくろみのひとつであった「我々は皆学生である。故に、如何に安くあげるか」という問題に対し、ある程度の答えを出せたと思います。会計の面からみて、決してパーフェクトではなかったとしても、8名もの人間が、これだけの費用で海外に出て、未踏のピークを踏み帰ってきたということは、北大及び札幌大の山岳部のひとつのやり方というものを示し、以後の海外遠征のあり方に大きな影響を与えるものと信じます。

各項目についての解説

国内支出

1) 航空運賃 安いチケットを探すということで、かなりギリギリまで待ったが、利用者の少ない地域はまず駄目であろう。結局、チケット、隊荷輸送共、アルパイン・ツアー・サービスに頼んだ。

2) 輸送 船便の方が安い、安全確実なのは、やはり航空便である。1Kg当り、約700円かかり、かなり高額である。個人装備は大体手荷物で乗せた。20Kgまでだが、10Kg程度は、オーバーチャージはとられなかった。

3) 保険 いつも世話になる大正海上火災KKに頼んだ。死亡後遺障害400万円で57,720円の掛金である。海外登山は危険度最大ということで非常に多くの割り増しを取られる。

- 4) 登山料 US\$ 600。円高のおかげで予算よりとても安くなった。
- 5) 装備 大ものは借りたが、ザイル等の消耗品とL.O.の装備等何だかんだと購入するとかかるものである。予算を組むときには出てこない装備雑品が思ったよりかかっている。
- 6) 食料費 国内分の費用は、 α 米の半分を自作し、雪印、東洋水産からの寄付、乾燥肉、野菜の自作でかなり安くなっている。国外支出の雑費の中に食糧費が含まれる。ビスケット、ノーペン、米、小麦、生野菜などは、ラワルピンディで購入した。
- 7) 通信連絡費 3月～6月にかけて、アルバイトや、実家に帰った者との市外通話に予想外の金がかかった。
- 8) 事務雑費 計画書代、事務用品、書籍代など、計画段階での雑費は予想以上にかかる。
- 9) 交通費 ガソリン代が主である。
- 10) 帰国後の事務報告雑費 フィルム現像代、通信費、装備通関費用などであり、残りは報告書製作費として使用する。

国外支出

- 11) 航空運賃 ラワルピンディからスカルドまで往復約200Rsでとても安い。
- 12) 航空輸送費 1Kg当り5Rsである。
- 13) 陸上輸送費 スカルド、カパルーでの交通機関は全てジープである。民間人はとても安い。が遠征隊に対して協定料金があり高い。Regulationで定められている。旅行者は民間人扱いである。
- 14) ポーター賃金 これはRegulation通り、一日リターン・チャージ、食費込みで60Rs

でおさえた。

15) 保険料 リエゾン・オフィサー、ポーターはラワルピンディで加入した。遠征隊用の保険会社が大体決まっているらしい。レートも Regulation で決っている。

16) リエゾン・オフィサー経費 Regulation で決っている一日当り 60 Rs の日当に相当するものを払った。我々のリエゾン・オフィサーは金銭的には淡泊で、過度の要求は全くなかった。

17) 滞在費・雑費 初め、一日一人 1,000 円の計画であったが都市部では全く不可能であった。遠征に支障のない生活をするなら、2,000 円は必要だろう。

○ 収 入

個人負担	3,405,000
寄 附	1,553,500
計	4,958,500 円

○ 国内支出

航空運賃(成田 ↔ ラワルピンディ)	1,850,000
輸 送(札幌 ↔ ラワルピンディ)	317,620
保 険(海外旅行割増)	479,490
登山料(600 US\$)	135,420
装 備	180,425
食 糧	210,834
通信連絡費	48,000
フィルム(35mm、8mm)	94,350
事務雑費	139,669
交 通 費	19,792
帰国後事務、報告、雑費	242,142
小計	3,717,740 円

○ 国外支出 (1 R ≐ 20 YEN)

航空運賃 (ラワルピンディ ↔ スカルド)	2,200 Rs
航空機輸送費 (")	4,327
陸上 " (スカルド ↔ カバルー)	7,190
ポーター賃金 (往: 35名 × 7日、復: 76 (各 × 日))	19,300
保険料	2,980
L.O. 経費	2,300
滞在費、雑費	23,741
小計	62,038 Rs
	≐ 1,240,760 円
	計 4,958,500 円

渉 外

石 村 明 也

カラコルム遠征に対する情報は、日本山岳協会編『海外登山の手引』、各遠征報告書を参照すれば、その詳細を知ることができる。

『登山にさしつかえない程度により安く』という前提で渉外を行なった結果の具体的なデータは会計の項に乗せた。ここでは苦勞するであろうと予想され、実際にその通りになった幾つかの事柄について述べる。

語 学 力

英語がセカンド・ラングウィジとして世界に定着しつつある現在、英語の必要性は素直に認めるべきだと思う。私自身英語は苦手嫌いであるが、役目柄少ない語彙を駆使して話さざるを得なかった。意志疎通を図ろうと努力しつつければ、なんとか解ってくれるものである。ウルドゥウ語や英語を使いこなせるのは望ましいが、かといって、それだけで様々な問題が解決するわけでもない。

リエゾン・オフィサー（連絡将校）

私達の連絡将校は、グラハム・タジュディン中尉（25才）であった。パキスタン国より命令されて連絡将校の役目についた彼は、カラチの大きな商家出身、陸軍軍人であり、背高く涼やかな顔つきをもち、私と同年の好漢であった。私達とパキスタン国民との間にたち、私達の行動が円滑にいく様助言し、又パキスタン国の定めた規則を私達が犯さない様監視するのが、連絡将校の任務である。

過去に多くの遠征隊が連絡将校とトラブルをおこしている。そういうトラブルがおこった場合、隊の行動に支障をきたすのは当然であるから、私達も彼の扱いに関しては慎重にならざるを得なかった。結果的に彼との交友関係はうまくいき、彼は私達に対して常に好意的であった。付合ううちに彼の性格が漸々と解ってきたのだが、洗練された教養を持ち、英語を母国語と同様に話し、軍人として鍛えられた彼は、その実力に応じた高いプライドを持ち、西欧文明に属する法治国家に生まれ育ちパキスタン人特有の思考方法を身につけていた。日本という道徳国家に生まれ育った私達と彼との間で、根本的な物の考え方に違う面があるのは当然といえよう。トラブルが具体化した時にその認識もなく双方が日本人又はパキスタン人であることに固執すれば、良い解決は得られない。幸いなことに彼にもそういった考えがあったようで、がまんすべきところではちゃんとがまんしてくれ、冷静沈着に任務

を遂行していったのは私達がある程度の成果をあげることができた一つの原因であると思う。

ポーター

金も日数も余計にかかるポータートラブルは、ポーターにとって実に良いものだ。私達も初心者ではあるが色々と対策を考え、カバルーに着く前に人の好きそうな者に声をかけ私達が通るキャラバン・ルートにある最奥の村フーシェの人間がよいと聞けば、その人間ばかり集めようとし、ヘッド・ポーターはポーター・トラブルの元だし荷物も運ばないから要らないと主張したが、カバルーでのポーター雇用の際、Deputy・commissionerと連絡将校と隊長である私との話し合い及び力関係で、ヘッド・ポーター（ムハメッド・アスラム、19才、スカルド・カレッジ在学中）、ポーター（33人）、コック（アリ爺さん）を雇うことになり、賃金の方は、食費込みで60Rs/人・日と観光省の規則通りになった。この条件は私達にとっては大いに不満であったが、前例を無視するわけにいかず承知したものだ。翌日よりキャラバンを開始し、カバルー～サリーン～マルティゴン～カンデ～フーシェ～シャイシチョー～スパンセル～BCと一週間かかってBCに着いた。シャイヨーク川の渡渉が増水期の為丸一日かかってしまったことや、当然予想されたポーター・トラブルに、隊の中で唯一ポーターを使っただけのキャラバンの経験がある私が体調をくずして専念できなかったことなどが原因となって日数がかかってしまった。悪い前例を残してしまったのは否めず、加えて、隊員にとって高度順化をしながら体調を整えるべきキャラバンで半数近くの隊員が何らかの形で体調をくずしたのはBC以上の高度順化の負の要因になった。

バルチスタンの人々はチベット系の言語を話し、ほがらかで社交性に富んでいるようだ。しかしながら、砂漠気候の中に点在するオアシスに住むという風土は、人々に生活の厳しさをきざみ込んでいくようだし、昔仏教国であったこの地域の人々の心には、今は回教が滲透し、女性の姿を人前に見せない特異な宗教性は、外国人にとって一種のギスギスした雰囲気をかもし出す。彼等にとってバクシーの理論は正統なものであり、値上げを要求したり、わざとゆっくり歩き日数を増やすことで、自分を卑下したりはしない。しかし、それでは私達も困るのである。最も貧乏な遠征隊の一つであることを自負する私達は一銭だって金はおしい。連絡将校を中にはさみポーターと話し合いを繰り返して、その度少しずつ妥協していく作業は、金銭に対して一種の潔癖さをもった日本人にとって苦手なことに違いない。そんな中で彼等ポーターのほがらかさは私達と彼等との人間関係に於いて、大いに救いになったものだと思う。

医 療

遠 藤 高 夫

はじめに

私は、医療担当として隊に参加したが、実をいうと、私が医籍に登録されたのは、7月だから、初めての医者としての診療行為がこの遠征隊のドクターというたいへんたよりないものであった。しかし大きな事故もなく、全員無事に帰国でき、ほっとしている。

出発まで

私の主な仕事は、薬あつめであったが、この点については、医大皮膚科教授神村先生、第一外科助教授戸塚先生、第一内科高須先生、脳外科高松先生、泌尿器科西尾先生には大変お世話になった。個人個人を健診する時間はなかったが、やはり心電図、肺機能検査等の循環系の検査は、高度順化について容観的なデータをうるという点で、実施すべきものであった様に思う。その他、抗生物質に対する過敏性のテストを全員に実施した。そして一度しかできなかったが、スライドを使って、心肺蘇生法についてのレクチャーをもった。又、心理テスト等を実施している遠征隊もある様だが、我々の様に気心の知った仲間であれば、そんな必要はなかった。

ラワルビンディーで

隊員全員が下痢と発熱（程度の差はあるが）を経験した。下痢は一日数行から十数行とかなりひどく、性状は水様便であった。下痢に対し、トランコロン、タスナルビン、リンコ等を対症的に処方したが著効例はなかった様に思う。余談であるが、ビンディーの薬局で買ったキノホルム剤はたしかに効果があった。これらの下痢の原因は、食事性因子（特に水）と情緒性因子（大きな環境の変化—不安—緊張—具体的に言えば、あの40℃にもなる暑さの中で、買い出しに走り、言葉の通じない相手と交渉しなければならぬ等）が大きな原因となり、むしろ機能性の下痢であり感染性のものとは思われない。従ってマイナートランキライザーを処方した方が良かったのではと今になって思っている。

発熱に関しては日射病と考えられる例や、咽頭痛を伴った上気道感染と思われる例もあったが、下痢の激しい者にも多くみられ脱水状態による中枢性の発熱と思われた。この様な例には補液が有効であるが、携行した補液量が少なく、登山中の使用を考え使用はひかえた。

スカルド～BC

やはり全員の体調は不調で、日射も強く、十分な水分摂取もできず脱水状態が続いた。7月16日、花井君が、嘔吐し熱発（38℃）し歩ける状態ではないため、マチュルのレストハウスに僕ととまる。

座薬をさしてやり、アスピリンをのませ、ブドウ糖と抗生剤を注射し、翌日には平熱となるが食欲がなく、現地食は全く手をつけられない状態であった。やはりこういう時には、病人食として日本食が必要であろう。又下痢をつづけていたトロン君が、7月18日カンデからフーシェへ向う途中ついにダウン。症状は悪心、嘔吐、下痢、発熱(37℃)で球結膜が多少黄染していたがウロスティクスでは、尿にウロビリノーゲンビリルビン等は検出されず、尿蛋白が陽性であり、これは発熱によるものと思われた。

フーシェのキャンプで電解質輸液500ccを点滴し翌日には回復。原因は高度の下痢による脱水と電解質のそう失と思う。フーシェからBC(4200M)の間で、第一の高山病の壁があらわれた。特に症状の強かったのは、僕と河合君、清野君であった。特に河合君は、スパンセル(3800M位)で、頭痛、悪心、嘔吐、発熱(39℃)を訴え、BCについても2~3日不調であった。僕はBCについた翌日、顔面の浮腫(目があけられない程)と嘔吐を経験。その翌日には利尿がつき浮腫は消失、他の隊員にも頭重感、頭痛は程度差はあるが認められた。その他、確認できたのは3人位だが、*cheyne-Stokes*呼吸がみられ、特に飲酒後の例に典型的なものがみられ、トロン君と同じテントに寝ていた僕はたいへん勉強になった。キャラバンの途中では、キャンプ地に着くたびに「ダワイ、ダワイ」(病気という意味らしい。)と言って、多数の村人が集まってくる。大半はただ薬が欲しいだけであるが、中には腹部に腫瘤を触れたり、腹水が貯っていたり、ひどい火傷の赤ん坊がいたり、とても僕らの持参した薬剤で、しかもただ一回の診療では焼石に水といった感があった。地方病性甲状腺腫については、以前から聞いていたので村人を注意して見ていたが、フーシェの村で2人程確認しただけであった。いずれも巨大な甲状腺腫で、形態はびまん性で柔らかかった。

BC(4200M)~C₁(5300M)

BCには悪天のため約1週間滞在したが、この間には不調を訴えるものも少なく、4000Mへの高所順応はうまくいった様である。C₁へ全員が集結するのに約13日間を要した。この間も、特に目立った症状を呈するものはなかった。

C₁(5300M)~Peak(6447M)

C₁からは、2日間にわたり、僕を除いた全員が偵察行動として2隊に分かれ、それぞれ1日づつ、約500M程の登降を行った。帰ってきた隊員は、軽度の浮腫と頭痛を訴える者が多かった。C₂(5700M)から、やはり2隊に分け、比較的調子の良い4人が上部のルート工作のため約500Mの登降を2日間。残り4人がC₁~C₂間の荷上げ2日間を行う。その後全員で6000Mを越え、5900MにC₃を建設。そろそろ第2の高度障害の壁であるので、咳や痰を訴える者については、肺野の聴診等してみたが全く異常はなかった。C₃建設後一度全員でC₁(5300M)へ下り、2日間を過す。明らかな浮腫はないのに、皆尿がたくさんでる。その後C₂、C₃を経て3日間をピー

クを落したのであるが、この間の行動時間は、この山行中最長であり、特に花井、八木、毛利、三君の行動時間は長かった様に思われる。6.000Mを越えての行動時間が長いにもかかわらず、頭痛、嘔気といった症状を訴える者は、むしろ5.000M代に比べ少なかった。この点やはりC₁へ一度降りた事は意味のある事の様思う。

帰 途

又全員が下痢気味となったが止痢剤はすでになく、絶対的にこの種の薬剤は不足であった。スカルドでは、トロン君が39℃～40℃の高熱と悪感を呈し、これが36～48時間周期で約1週間持続し、貧血、肝脾腫等はなかったが、第一にマラリヤ、第2に腎盂炎を疑い、エルコクイン(クロロキン)とケフレックスを投与し10日位してから平熱にもどり、その後発熱はなかった様である。

以下に携行薬剤その他をまとめたが、どれ位の量を持っていくかは、他の装備、食料と異なり、どの様な事故ないし疾病を予想するかそして輸送機関又は病院のある所までの距離等で大巾に異ってくる。

今回は、止痢剤、ビタミン剤、下熱剤、抗生剤以外は殆んど使用しなかったが、薬が多すぎたとは思っていない。むしろ輸液は、もっと持って行きたかった。

抗 生 物 質

ケフレックス(1.000mg)	200 Cap	リンデロンVG(5g)	10 Tub
ビブラマイシン(100mg)	60 Cap	アイロタイシン眼軟コウ(5g)	5 Tub
リンコシン(600mg)	10 Amp	テラコートリルスプレー	5 case
セファメジン(1.000mg)	10 Amp		

鎮 痛 下 熱 剤

ニューグレラン	60 Tab	EA錠	40 Tab
セデスG	100 Tab	PL-G & Cinal	30 pack
メゾリン座薬	100 Cap	ソセゴン(30mg)	10 Amp
ル ル	200 Tab	ブスコパン	200 Tab
ベンザ	100 Tab		

鎮咳薬

メチコン	40 Tab	リン酸コデイン(20mg)	30 pack
------	--------	---------------	---------

消化健胃粘膜保護剤その他

ポリトールゼ	200 Tab	ソルベン	40 Tab
ビオフィェルミン(1.0)	200 pack	トランコロソ	80 Tab
ファイナリンG	50 pack	タンナルピン(1.0)	30 pack
ペリチーム	80 Tab		

点眼薬

フラビタン	10 case	リンデロンA	5 case
-------	---------	--------	--------

抗ヒスタミン剤

ポララミン	50 Tab		
-------	--------	--	--

利尿剤

クトリックス錠	100 Tab	ラシックス(40mg)	10 Amp
---------	---------	-------------	--------

凍傷予防剤

ユベラ	200 Tab		
-----	---------	--	--

消炎剤

ダーゼソ	60 Tab		
------	--------	--	--

気管支拡張剤

ブリカニール	80 Tab		
--------	--------	--	--

ビタミン剤

ビタノイリン	800 Tab	ハイシー	200 Tab
--------	---------	------	---------

ステロイド剤

ハイドロコトソン (250 mg)	8 amp	プレドニン錠 (5 mg)	30 Tab
(500 mg)	5 amp		

痔疾治療薬

ボラギノールS	40 cap
---------	--------

抗マラリア剤

エルコクイン (100 mg)	400 Tab
-----------------	---------

強心剤

ノルアドレナリン	10 amp	カルニゲン	10 amp
----------	--------	-------	--------

呼吸促進剤

テラプチック	10 amp
--------	--------

外用薬

プロパデルム	10 Tub	オイラックス	10 Tub
ケナコルト	10 Tub	ホウ酸アエン化軟コウ	200 g

小外科手術器具

メス (デスポ)	3	ハサミ	2
有鉈ピンセット	1	持針器	1
無鉈ピンセット	1	縫合糸	2
ペラン	2	手袋	3
コッヘル	2	滅菌ガーゼ	200 g

麻酔剤

キシロカイン (30 ml)	1 amp	カルボカイン (30 ml)	2 amp
----------------	-------	----------------	-------

補 液

生理食塩水	500 ml	50%グルコース	5 amp
ラクテックG	1.500 ml	メイロン(20ml)	10 amp
20%グルコース	20 amp		

そ の 他

注射器(デスポ) 10ml	5	ばんそうこう	10
(デスポ) 5ml	20	パテックス	800 g
(ガラス製) 20ml	2	聴診器	1
注射針	40	血圧計	1
輸液セット	4	体温計	3
エラスター針	6	導尿カテーテル	3
ガーゼ	400 g	シイネ	5(大2・中1・小2)
巻包帯	5	エアウェイ	1
弾性包帯	3	ウロスティクス	30
マキロンネット包帯	2 m		

気 象

吉 田 祐 一

天気は予想に反して悪かったが、それでもなんとか行動はできた。好天と悪天の周期は年によって異なり、はやくそのリズムをつかむことが必要である。

気がついたのは、好天中に一度絹層雲が出たあと消える日がある。その次の日は曇りなどでぐずつくが行動には支障のない日があり、その翌日から悪天となる。

悪天の終わりは良くわからず、突然として快晴となることがあった。今年の周期は図のように割合とはっきりしていた。

7/12	○	スカルド	
13	○	<キャラバン>	
14	○	スカルド→カプルー	
15	○	カプルー→サリーン	
16	○	サリーン→ゴン	
17	○	→ガンデ	
18	○	→フーシェ	
19	○	→セユスチョー	
20	○ → ◎	→スパンセル	昼間絹積雲出る、夜中雨が降る
21	◎ 時々 ●	→BC	
22	● 時々 ◎		
23	● 時々 ◎		
24	① 後 ☹		朝-3℃、氷が張る
25	● 後 ①		夕方暗間が広がる
26	● _キ 時々		
27	● → ①		午後今迄とは違う宵空広がる
28	○		
29	○		
30	○		

31	○ → ◎ → ○	中継 C へ移動	絹層雲が日中一時期広がるが消える
8/ 1	◎ → ● → ①		
2	◎ → ●		
3	● 時々 ◎		
4	●		
5	◎ 時々 ⊗	C ₁ へ移動	
6	○		晴れるとは予想もつかなかった
7	○		
8	○		
9	○ 一時 ①	C ₂ 建設	この日絹層雲が出現
10	○ → ① → ⊗ → ①		
11	◎ → ⊗ → ◎		雪は吹雪となり雷も伴ったが後止む
12	⊗	C ₁ 下山	
13	⊗		
14	◎ 時々 ⊗	C ₂ 移動	
15	① 時々 ◎	C ₃ 建設	
16	○		
17	○	登頂	
18	① → ◎	C ₁ へ	絹層雲がみるみる間に広がり全天を覆う
19	◎ 時々 ●	B C へ	
20	●		
21	● 後 ◎	帰りのキャラバン	
22	①	フーシェへ	
23	○		
24	○	カブルーへ	
25	○	スカルドへ	
26	①	"	
27	①		
28	①		
29	①		
30	○	ラワルピンディへ	

協力者氏名

(五十音順・敬称略)

個人

相川 真・朝比奈英三・鑑 邦芳・安藤朝夫・有馬 純・有馬 真・安保秀勝・石田隆雄・伊藤一弘・池田成之・今村昌耕・今村正克・五十嵐恒夫・越前谷幸平・遠藤正之・岡野路子・岡田勝英・太田節郎・岡見吉郎・大村富士夫・小川幹雄・及能達男・神村瑞夫・川口昌宏・神谷正男・川上隆夫・岸田 宏・岸川啓二・北川健二・小玉庸郎・小須田達治・小宮山英重・小林 年・坂本直行・下沢英二・白石和行・白浜晴久・篠原義文・杉野目浩・関野幸二・高木 均・高松秀彦・田中正敏・高須重家・竹田史郎・高篠和憲・竹山太郎・千葉靖男・土屋 彦・戸塚守夫・中村哲彦・中村晴彦・中野征紀・長田 進・西尾 彰・西 信博・新妻 徹・野田四郎・野島たけし・橋本 巖・橋本誠二・橋本芳郎・橋本正人・初見一雄・林 和夫・東 晃・東 浩・古田 進・福島健夫・藤木忠美・古川幹夫・伏島信治・星野一也・本多和彦・前田仁一郎・松村 雄・宮下秀隆・村田義昭・森田英和・山田真弓・山田知充・山本直也・山崎英雄・山崎信男・安田裕子・山口淳一・山口健二・湯川龍二・吉村啓一・渡部 勇・渡辺左武郎・渡辺信彦

団体

札幌テレビ放送㈱・札幌大山岳部現役一同・札幌大有志一同・山岳同人タンネ・つる同人・東洋水産㈱・北大工学部機械工学科・北大体育会・北大山岳部現役一同・山の店ダケカンパ・雪印食品㈱・雪印乳業㈱

あ　と　が　き

帰国してからすでに一年余りが経過しました。先日、ネパールで越冬し、今年のシュマリクンヤンチッシュ隊に参加したトロン隊長が帰ってきました。やはり同隊に参加した花井さんが帰ってくれば、ようやく全員が日本の地にいるということになります。今年の隊も全員同時登頂というすばらしい成果を残しました。更に、年来の目標である冬のヒマラヤ、ナラカンカール遠征以来因縁深いグルラマンンダータ、あるいは8,000メートル峰など新しい計画が推し進められています。

「北海道の山を登るセンスで」「夏山計画の1つとして」という性格の僕らの隊は、それなりに成果を得ることができ、またAA CHにしばらくとだえていた、ヒマラヤ遠征の再開のきっかけを作ったという点でも大きな意味があったと思います。

この遠征の前後にAA CHには暗いでき事がありました。山岳部の歴史に大きな影響を残し、我々ヒマラヤ指向の若い者達の良き理解者だった中野征紀さんの逝去。そしておそらく僕らの登山人生の中で最も悲しいできごとである、今年3月の知床での3人の仲間の死。

こうした悲しみを乗り越え、しかし忘れる事無く我々は前進していかなくてはなりません。

最後に、この遠征に協力して下さった多くの方々に改めてお礼を申し上げます。

毛 利 立 夫

昭和54年12月発行

発行者 北大山岳部山の会カラコルム速征隊

印刷 北大印刷

発行所 北海道大学体育会山岳部

札幌市北区北17条西6丁目



適 応 症

アンピシリン感性の黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌、化膿レンサ球菌、肺炎球菌、大腸菌、プロテウス・ミラビリス、インフルエンザ菌による下記感染症。咽頭炎、喉頭炎、扁桃炎、膀胱炎、猩紅熱。

包装 250mg 100cp 500cp 薬価 250mg 1cp 256.50

Yamacillin
250



山之内製薬が開発した…タランピシリン製剤

- 抗菌スペクトルが広く、グラム陽性菌・陰性菌に有効。
- 経口投与時の吸収がすぐれ、高い血中濃度、臓器内濃度が得られる。
- 食後投与・反復投与でも、吸収率は殆んど変わらない。
 - 尿中に高濃度に排泄される。
 - 下痢などの胃腸障害が少ない。

 山之内製薬

ヤマシリン カプセル 250

● 用法・用量、使用上の注意については説明書をご覧ください

★250mgカプセルのほかに、山之内製薬株製造の125mgカプセルをビーチャム薬品株より発売しております

持続性

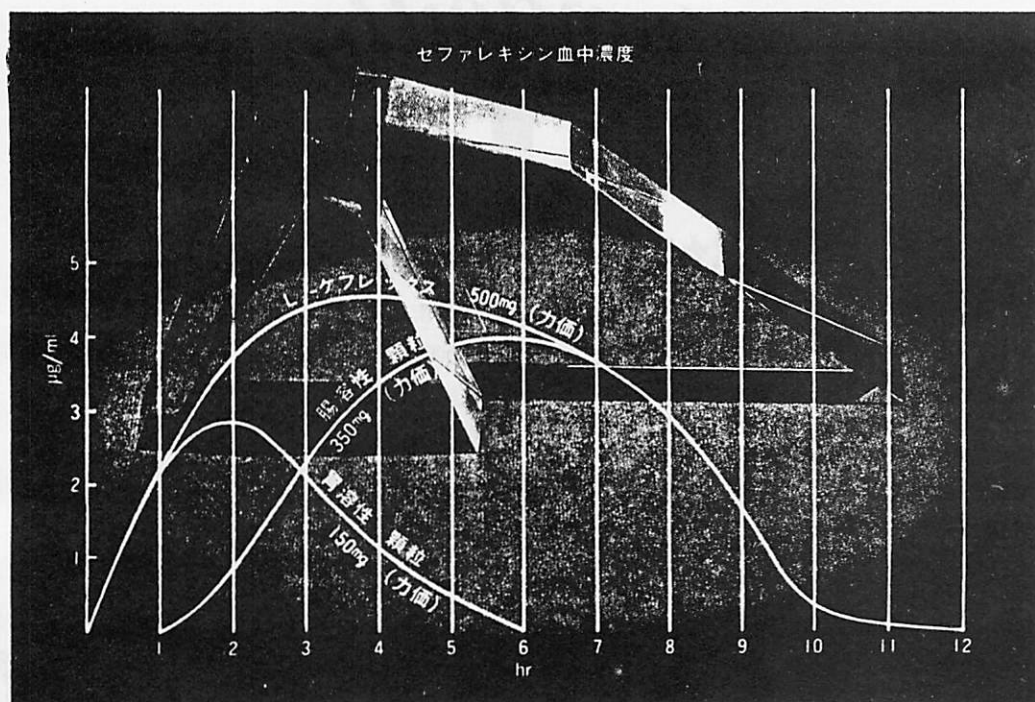
経口用セファロスポリンC系抗生物質

L-ケフレックス® L-KEFLEX®

(日抗基 セファレキシン複粒)

®:「ケフレックス」「KEFLEX」は登録商標

1. 胃溶性および腸溶性のセファレキシン顆粒を配合した持続性製剤です。
2. 血中・尿中濃度が長く持続するため、服薬回数が1日2回ですみます。



Lilly イーライ リリー社提携 シオノギ製薬

大阪市東区道修町3-12

マルホの医家向医薬品

局所凝血阻止剤

ヒルドイド 軟膏

1g中

ヘパリン類似物質(動物臓器抽出のムコ多糖多硫酸エステル)・・・3.0mg

**特長**

1. 血液の凝固および線維の形成を抑制します
2. 末梢血液の循環を促進します
3. 局所血栓性疾患、血行障害に基づく疼痛性、炎症性疾患および線維形成性疾患に対して効果が期待できます

適応症

外傷(打撲、捻挫、挫傷)後の腫脹・血腫・腱鞘炎・筋肉痛・関節炎
 血栓性静脈炎(痔核を含む)、凍瘡
 血行障害に基づく疼痛と炎症性疾患
 肥厚性癬痕・ケロイドの治療と予防
 進行性指掌角皮症、筋性斜頸(乳児期)

包装 40g、160g、20g×10

使用上の注意、用法・用量などについては、製品添付の説明書をご参照ください

健保採用

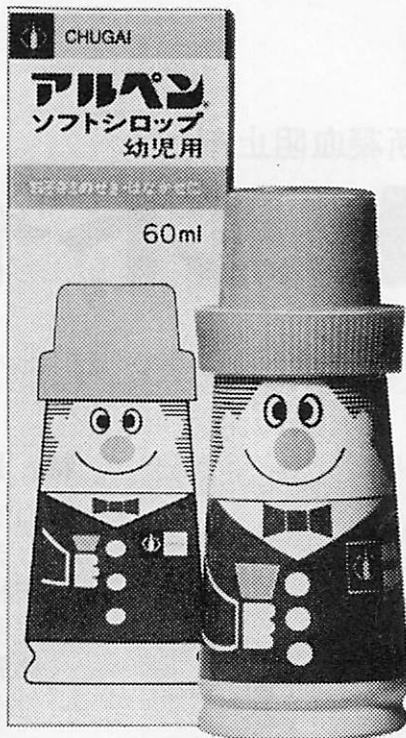

マルホ株式会社 大阪市大淀区中津1丁目6-24

● お子様のせき・鼻かぜに
かぜの諸症状の緩和に

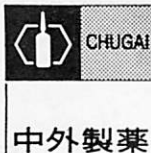
アルペン[®] ソフトシロップ 幼児用

● 飲みやすい液剤/せき・たん

アルペン[®] せきどめ



価格…小売価
60ml × 1 780円



かぜ薬はお早めに

アルペンはかぜの諸症状にあわせて、ご推売していただけるよう品揃えを致しております。

かぜの諸症状の緩和にアルペン製品をよろしく願います。

● 胃粘膜保護剤が配合された感冒薬
かぜの諸症状の緩和に **アルペン** エース
カプセル

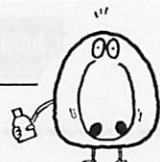
● 総合感冒薬
かぜの諸症状の緩和に **アルペン** ソフト錠

くち(口中)・のどの殺菌・清浄に **アルペン** うがい薬

● 頭痛・生理痛・歯痛に
鎮痛・解熱剤 **アルペン** 顆粒

アルペン製品は「使用上の注意」があることをお含みの上よろしくご指導ください。

鼻みず・鼻づまりに **新ナーベル** 点鼻液



L - 4

北大山岳館

